

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

〒658-8501

神戸市東灘区岡本8-9-1

電話 (078)435-2331(ダイヤルイン)

第48回 総合研究所公開講演会

「ウォーキングの文化史——イギリス人はいかに歩き、何を生み出したか」

平成21年7月11日(土)

講師 中島俊郎氏

(甲南大学文学部教授)



安西所長：

時間がきましたので、総合研究所2009年度春期公開講演会を開催致します。みなさん、このお暑い中、ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私は当研究所の所長をしております安西と申します。

本日は文学部の中島俊郎先生に「ウォーキングの

文化史——イギリス人はいかに歩き、何を生み出したか——という題目で講演をお願いしております。中島先生は昨年『イギリスの風景——教養の旅から感性の旅へ——』という本を上梓されました。それが非常に好評で、朝日新聞や読売新聞にも書評が掲載されております。ここにもウォーキングに関するイギリス人の思いが触れられております。

中島先生は甲南大学大学院の博士課程をおえられ、ずっと甲南大学の文学部の英文科で教鞭をとられています。私は法学部ですが、研究会で時々お会いしております。10年程前にはイギリスで同じ大学に留学していきまして、非常にお世話になりました。昨年も中島先生はオックスフォード大学に留学され、書かれている本もおもしろいですが、留学中に培われた教養をふまえて本日も非常に興味深いお話をされると思います。特にウォーキングということで、最近では日本においてもウォーキングブームになっておりますけれど、イギリスにおいて、その発祥を知ることが出来るというので、みなさんのご期待に応えることができましたらありがたく存じます。

中島先生：

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました文学部の中島俊郎でございます。今日は「ウォーキングの文化史」と題して、イギリス人が歩くことによってどのような文化をはぐくんできたか、というテーマをございしよに追究していきたいと存じます。週末の貴重な午後の時間をしばらく頂戴します。

在外研究 この一年間（2008年4月-2009年3月）、甲南大学から在外研究員としてリサーチをする機会を与えられました。私としては二度目のサバティカルの恩恵に浴したわけですが、与えられた時間をできるだけ有意義に使用しようとオックスフォード大学オール・ソールズ・カレッジのフェロー、キース・トマス先生と事前に研究テーマを話し合いました。一年間で書き上げることが出来るテーマで、まったくといっていいほど研究が進んでいない、突き詰めていけば着手されていない主題を選ぼうということになりました。

そこで今日、今からお話します「ウォーキングの文化史」というテーマを選択したわけであります。よく私たちが歩く足跡を残すと言いますが、じつさい人間の歩いた「跡」はのこりません。雪原にされる足跡でも春が来て雪がとければ消えてしまいます。人間の文化的営為が時とともに消失してしまうのは何も「歩行」だけに限ったことではありません。ほとんどのことがらが認識の表層から消え去っていつてしまうのです。すべてが時間の浸食とともに忘却の彼方へと押し流されてしまうわけですが、逆に言えばだからこそ文化史のテーマとして、掘り起こしていく価値があるのかもしれない。私

たち人間はすべからず、歩きながら人生を築きあげていく存在なのですから。

そこで今回の講演ではできるだけ具体例に即して、図版・写真を援用して論を進めていきたいのですが、何分、一年間、冬眠の熊のように図書館、資料室、古文書館にこもり考えてきたことですから、煮詰まりかねないこのテーマを外の新鮮な空気にとらして、皆様に吟味していただくかと考えています。明治時代の留学生のように一生懸命にテーマを追いかけてきましたが、果たして皆様のもとにどれほどのことがどれくらい届くものやら、はなはだ心もとない次第であります。

用意しました資料はA3の大きさのハンドアウトが一枚、ウォーキングの案内紙『コッツウォルド・ライオン』のタブロイド判が2枚、お手もとに届いているでしょうか。印刷の不鮮明なものがございましたら、どうか拳挙して下さい。係の者がすぐにお伺いして取り換えますから。

歩行という意味

歩くことの身体性 さて、私たち人間は「歩く」という行動をことさら考えようとはしません。「息をする」のとほぼ同じくらい自然なことだと心得ています。でも少し考えればこの行動はとてつもない意味があるとわかってきます。たとえば「しゃべること」と対比させて考えてみたら、その辺りの事情がよくわかります。何の目的も無く、話題・内容も特定せずに自由に喋りつづけてみると命じられれば、私たちは大変な困難と困惑を覚えてしまいます。歩行も然りです。無目的にどこへでも好き勝手に歩き続けろ、と言いつけられて窮しない人はいません。とうてい歩くことなどできない。つまり、「歩くこと」は私たちの意識と密接に関係がある、きわめて意識的な行動といわねばなりません。

また歩く形態、歩く姿勢を考えてみましょう。私たちは足を広げてまっすぐ立ち上がり、それから5度くらい前方に上半身を傾斜させて歩をすすめます。身体の重心を巧みにとりながらその運動を持続させているのです。先に歩行をきわめて自意識に満ちた行為と申し上げましたが、身体的にも意識せずにはできない行動なのであります。細いロープの上を漂々と歩いていく人がいます。綱渡りの芸を披露できるのは重心の所在を身体的に熟知していなければたちまちのうちに地上にたたきつけられてしまいます。以上のような事例からみても、「歩く」ことが

人間の身体と全人格を傾注しなければ成し遂げることができない行為であると理解していただけたかと思えます。では次にこの歩くという行為を人間の生涯という時間軸にそっててみましょう。

ファースト・ステップ 何気なく私たちは歩きだしたようですが、赤ちゃんをみていると、一気に歩き出せるほどそんなに簡単なものではありません。悲しいかな、人間は生まれてすぐには歩けないのです。だから「歩き初め」という行動ほどの民族にとっても意義深い行為として認知されています。



図1 ゴッホ「ファースト・ステップ」

古来から美術のテーマになってきたゆえんでもあります。多くの画家がこの「歩き初め」をテーマとしてとりあげています。母親や乳母が手を広げて、「さあ、こちらへいらっしやい」とわが子にむかい、励ましの声を投げかけます。例に欠かないくらいどの画家も描いているテーマなのですが、とりわけゴッホの作品は見事です。人間が歩き出す瞬間を、全生涯の一步として描き切っているからです。当時、ゴッホは精神が錯乱して精神病院に入院していました。ミレーの『ファースト・ステップ』を見て非常な感銘を受け自らも描いてみようと思立ったわけです。弟テオから油絵の具をさし入れてもらいゴッホは一心不乱に描き出しました(図1)。

この絵画の特徴的な点は場面を早朝に設定しているところにあります。言うまでもなく早朝は、まだ踏みしめていない、誕生からさほど時間がたっていない、わが子の歩みと軌を一にしています。親である貧しい農夫のふたりは早朝の光を浴びていて、絵の具の「白色」が早春、早朝を雄弁に物語っています。朝の空気、大気、灌木、野菜の茎など——すべてが白を基調にしています。「原初」そのものがここでは描かれています。生まれたわが子の歩きはじめを、人生の第一歩を、朝の畑仕事というしかるべ

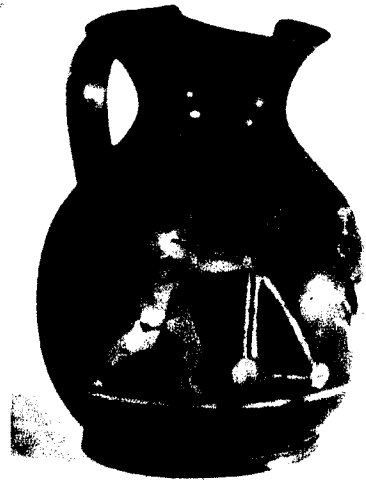


図2 歩行器

き環境におき、どの色にも染まっていない無垢な白色の世界に対置させて封じ込め、色彩でもって描き出したところにゴッホの天才があります。

歩行と時間 では歩行の次の発達段階に進んでみましょう。これは紀元前4世紀初頭に製作された壺です。「ベビー・ウォーカー」という歩行器が描かれています(図2)。われわれ人間は他の動物ほどすぐにはうまく歩けませんので、これを補助にして徐々に歩くすべを身につけていきます。年齢を重ね人生の終盤にさしかかると、人は赤ん坊にもどっていくといわれますが、この段階にいたって足腰が弱くなり、再び「歩行器」のお世話になるわけです。「ファースト・ステップ」から老人の「歩行器」までの図像を援用して「歩くこと」の意義を考えますと、時間、歴史と歩行が密接な関係があるとお分かりでしょう。ここで歩くことがはっきりと歴史的パラダイム(枠組)に組み込まれていると理解して、次の考察を進めることができます。

私たちがどこへ向かい、なぜ歩いていくのかという問いに向かい合おうとするならば、「スフィンクスの謎」を思い出さずにはいられません。怪獣スフィンクスは謎を発します—「朝4本足で、昼間は2本足になり夕べには3本足になるものは何か」と。ご存知のように、答えは「人間」なのですが、赤ん坊のときは四つん這いで、盛年・壮年期は2本足で歩き、やがて老年をむかえ杖の助けをかりて3本足になるという。こうしたスフィンクスの謎に仮託された時間の周期性をみますと歩行というものが歴史のサークルに組み入れられている、と考えてもそれ

ほど不自然ではないでしょう。

でも、どうでしょうか。杖をついた老人を思い描くついでに達観した気持ちになりますが、私たちは巧みに重心をとって誰もが綱渡りをできるわけではないように、意外と歩くことが下手なのではありませんまいか。人生という綱のうえで重心をとる達人になれず大部分の人が生涯を終えてしまいます。でも、それでいいのだとも一方では勝手ながら思います。迷いつつ彷徨しながらも歩きまわるのがわれわれの人生とも言えるのですから。

人間が歩き出すとき 歩行は多面的な文化要素を束ねて多彩な意味をおびてくる行動ですが、「歩くために歩く」、「歩くことが喜びである」というような今日的な意味でのウォーキングは、18世紀末までは現れませんでした。そもそもイギリスという国は歩くことにきわめて不向きな国でありました。馬車などの移動手段がない時代、貧しいものは歩かざるをえませんでした。移住とか逃亡、何らかの刑罰のために強制的に歩く以外に、つまり歩行による旅行、目的をたずさえてあえて歩行することはごく最近、1780年代のことです。

とはいえ歩行が積極的な意味を帯びだすのが産業革命の時代であったという一致はじつに興味深い現象です。ほぼ同時に起きた交通革命は、まだ鉄道の時代が到来していませんが、駅馬車、郵便馬車の時代でした。速い馬車でしたらゆに時速70キロくらいで走ります。人間にとってこれまで経験したことのない速度でした。時速40キロくらいの馬車に搭乗していても、同時代の文献をみれば驚くべき速度として今日のリニアカーに乗っているような筆致で描かれています。とてつもない速度の時代の到来とともに人間がゆっくりと歩きはじめたという事実にはいたく好奇心をゆりうごかされます。

歩行と祈り

巡礼という歩行 だが18世紀まで歩行の「文化史」の側面をいさよるような事例がまったくないわけではありません。それどころかイギリス文化史の表舞台には多すぎるくらい事例が残っています。先にイギリスが歩くことに不向きな国であるといいましたが、16世紀あたりから自由な歩行を法律で禁じていました。農民などの移動を非常に嫌いました。浮浪者取締法という、土地を離れる者を取り締まる法が依然として威力を示していた。浮浪者は、見つかったら即刻、もとの土地へ引きずり戻されるか、鞭打

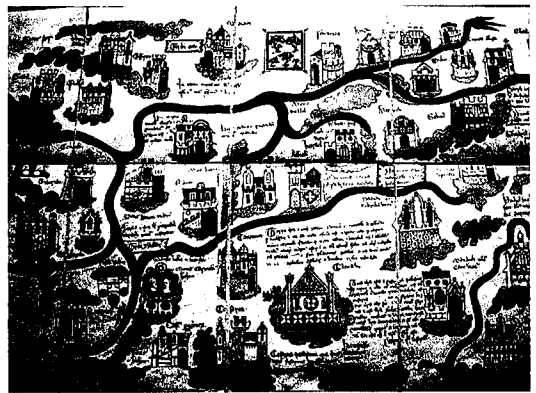


図3 ウェイの巡礼地図

ち、はては処刑という厳罰まであったのです。この法律が永く拘束力をもっていました。それゆえ、歩いて移動することは社会的にも卑しく経済的にもゆとりのない身分の者が犯す許しがたい低俗な行為だと見なされたわけでありました。

ウィリアム・ウェイの巡礼 でも先ほど申し上げましたように歴史の間隙を縫い歩行する人が数多くいました。そのなかでも記憶にのこるのは、巡礼にともなう「歩行」です。

15世紀、オックスフォード大学の教授であったウィリアム・ウェイ(1407?-76)がエルサレムへ巡礼に旅立ちます(1458、1462)。全行程すべてを歩いたというわけではないが、できるだけ自分の足で歩こうとします(図3)。宗教改革以後、キリスト教の内実はカトリックからプロテスタントへと宗派が変わり、儀礼的なことは廃止されたが、巡礼という宗教的な慣習だけは依然として存続しました。文学の世界ではチョーサーの『カンタベリー物語』、ジョン・バニヤンの『天路歷程』がつとに有名で、後者は寓意の物語でクリスチャンという主人公が伝道者の導きによって救いを求めて歩き出すという物語の枠組みをそなえています。

今回、ポドリアン・ライブラリーで調べたウィリアムがみずからの巡礼を報告した写本には地図と詳しい旅程がついています。歩くという苦難を身体に加え、呻吟すればするほど神の御許へと近づくと考えたのでしょうか、ウィリアムもよく歩きます。歩行が克己の精神にうらうちされて、エルサレムへたどりつく。英語とラテン語の混交文で書かれた写本は、今日の巡礼、卑近なわが国の例をあげれば「四国八十八ヶ所お遍路」となら変わらない側面があります。主キリストの足跡、説教のとき用いた台

座、聖典などキリストの奇跡を求めたどり、聖都へと旅をする。旅の土産を忘れていないのも今日と同じです。神の聖地がまるで軍事基地のように一定のところしか参拝できず、立ち入り禁止の場所が予想以上に多く、ほとんど既定のルートを歩かねばならないのは、現在の宗教を標榜する観光地と一脈通じていて、まさに一驚をおぼえてしまいます。

現代の巡礼 巡礼は世界の多くの宗教に共通に見られる現象ですが、その精神が今日もいささかも色褪せていないのも決して偶然ではありません。オックスフォードにはアシュモリアン・ミュージアムという美術館があり、世界の宗教を巡礼という切り口で理解しようとする「聖なる旅」という特別企画展を催しました。いろいろな宗派に見られる巡礼の諸形態が紹介されていたのですが、私の興味をもっとも惹いたのは、キャロラインという女性がたどった現代の巡礼です。そこには古来より伝統的に継がれていた巡礼の息吹が再現されていたからです。

キャロラインの巡礼 キャロライン・フレンドはどこにでもいるふつうの主婦であり、なんら冒険とは縁のない日常的な人生をおくっていました。それがある日突然、その幸福が破られてしまう。ニュー



図4 キャロライン

ジーランドに留学していた息子が交通事故に遭い瀕死の重傷を負う。次に娘が強度の拒食症を罹ってしまい生死の境を彷徨する。さらに悲劇は重なり、母親がむごたらしくも癌にかかり悶死する。最後には永年勤務した会社から解雇、夫との離婚が待ってい

る。この世の考えられる限りの悲劇にみまわれたキャロラインは、死をも考えることができないうらい心身ともに疲弊してしまい、生きた屍状態におちいってしまう。

だが、ある日、未知の人のすすめにより、エルサレム、パチカンと並ぶキリスト教三大巡礼地のひとつ、スペインの聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラまでの巡礼の旅に出る。距離にして1500キロ以上あります。見ず知らずの10人ほどの巡礼者にまじって、ただひたすら歩き続けていく。そのような触れ合いのなかで感謝の念が再び沸き起こり、山間にある修道院の静謐に自己を再生させてみようとする活力、生きる息吹を感じだすのです。最後に聖地にたどり着いたときには自分よりも他人を思い遣る「やさしさ」が全身を満たしていました。激動の中世となんら遜色のない混迷をきわめた現代こそ歩くことで祈りをささげる巡礼がより活性化されていくように見えてきます(図4)。

ローマへの道 錯綜した人生から自己を救済するという手段の一助として巡礼に赴いた人として忘れてはならない人がいます。巡礼という営為から自分の作家としての生き方を模索した文学者もこうしたキャロラインのような無名の巡礼者の系譜につながる一人でありました。あらゆるジャンルにわたり多くの著述をものしたヒレア・ベロック(1870-1953)という作家がいます。人生に疲れたこの作家が1902年に書いた『ローマへの道』は、巡礼の精神でつらぬかれた「救済の書」といえましょう。ベロックは200冊以上の本を書いた多作家でありベストセラー作家でありましたが、自らすすんで筆をとったのはこの作品のみであると述懐しているほど、その文学的出発において大きな意味を占めるものです。歩くことの意味が自分でもわからずただひたすら求道する姿は、中世の巡礼者と重なり、少なからぬ感興を与えてくれます。

自己実現としての歩行

トマス・コリアト 巡礼という祈りの歩行がありますが、先ほど言及しました18世紀末までにイギリス文化史のなかには興味深い人が何人か登場してきます。その興味深い最初の人物としてまずトマス・コリアト(1557?-1617)の名前を挙げなくてははいけません。シェイクスピアとほぼ同じ時代の人であります。その人が自分の文学的な出立を試みようとして旅に出ます。社会的な名声を探しあぐね、



図5 『クルディティーズ』

詩人として何とか世に立ちたい、これは文学青年のつねであります。コリアトは当時の人々が憧憬の対象としていたヴェニスに向けて、1608年、故国イギリスを後にします。

最初は費用が潤沢でしたので移動手段としては馬車を用います。歩くことについてまだ全然と言っていいほど目覚めてはいません。ところがヴェニスで2週間滞在し、懐中の金子を全部使い果たしてしまいます。イギリスからは歩いたり馬車に乗ったりして何とか目的地にたどり着いたわけですが、帰路の旅費が尽きてしまい歩いて帰らざるをえない境遇に追いやられます。1608年5月のある日、記録によれば朝5時から歩きはじめ、夕方6時まで、ほぼ58キロの距離を歩き抜きます。しかし往きとはまったく違う気持ちを彼は覚えます。これは800ページ以上もある旅行記『クルディティーズ』(1611)の表紙(図5)ですが、コリアトはその旅行記のなかに石碑や墓碑など碑銘をことごとく記録しています。つまり今日で言えば現地ととる旅行写真のような役割をその記述は果たしていたのです。現代の目からすれば記述が詳細すぎて読み物としてはさほど面白くないのですが、まともなガイドブックもなかった時代であって、ヨーロッパへの旅行者にとっては情報として大変重宝な記録となります。

くたびれた靴 その後に起こってくる、哲学者フランシス・ベーコンなどの賢者のおすみつきをえてイギリス貴族がごぞって参加するグランドツアーという「制度」があります。そのガイドブックとして

コリアトの本書は中心的な位置を占めます。つまり彼が歩いて記録した、正確に言えば864ページに亘るこの記録の書『クルディティーズ』(コリアトはこの旅行記を「私の青い果実」と呼んでいた)は、ヴェニスから故郷に帰るまでの詳しい歩行記録で埋められ、当時のヨーロッパ情勢を知るうえで重要な資料となっています。

そしてこの時はいていた靴はチャーサーの時代からほとんど変わっていないのです。厚底の運動靴に私たちは慣れていますが、当時の皮靴というのは本当に薄くて軽いのに驚かされます。ひたすら歩いて帰りましたので自分のことを「旅行王」とであると称し、サマーセットの生まれ故郷へ帰還を果たします。そして、自らの大旅行を記念して村の教会に月桂樹をつけた靴を祭壇のうえに奉げました(図6)。



図6 くたびれた靴

現在もまだあるという情報があり、ぜひとも写真に撮りたいと思い、車で行ったのですがどこにも見当たりません。教会の牧師に聞きましたところ19世紀の最初まではしっかりとあったという記録は残っているのだけれど、何時なくなったか分からないということでした。せっかく遠方まで探しに行ったのに、失意のままオックスフォードへ帰ってきて、カレッジの友人に「あの靴はもうなかったよ」と報告したらその友人から「そりゃ、靴が臭くなったため捨てたのだらうよ」と事無げに言われてしまい、がっくりきました。ともあれよく歩きぬいた靴だったそうです。

ロング・ウォーク やがて詩人として起つ強い決意をして、コリアトは、はるか東方のムガル帝国に向けて、ロンドンから海上を除き全行程歩きぬき、砂漠を横切ってアジアに入っていきます。そしてようやく現地へたどり着いたと思うと、インドの奥地で熱病にかかって客死してしまうのですが、そ

THOMAS CORIATE
Traueller for the English
VVits : Greeting.

From the Court of the Great MOGVL, Ref-
dent at the Towne of ASMEER, in
Esterne INDIA.



図7 象に乗るコリアト

の間に友達と母親に長文の手紙(1616年)を送っていました。コリアトがなゼインドへ行ったのかといいますが、名声をたてるという大望のほか、強い望みといえば象に乗ることでした。当時に行ってみれば今日の私たちが竜にでも乗るような夢に近い感覚であったのかもしれませんが。ムガル帝国の君主に自作の詩を聞いてほしい、と詩人ですから韻を踏んで朗々たる演説をなし、思いのたけを吟じ、象に乗ることにもついに成功し、また同時に詩人としての名声を博すこともできました(図7)。

コリアト・ブーム どうも近年コリアトの気宇壮大な旅行記が、イギリス人のロマンというか、琴線をつつよう、「コリアトの足跡を追って」と題するサイトがインターネット上に2、3見られます。関連した書籍も5冊ほど出ています。コリアトの足跡を訪ねて同じ旅路を歩いてみるというのは、航空機時代の現代人からすれば哀愁をさそう旅であるのかもしれませんが。

ジョン・テイラー コリアトの歩行旅行は、文学サロンでもあったマーメイドクラブという旅籠に出入りしていました自称「詩人たち」にも大いなる感化を与えました。このクラブはかつてシェイクスピアやベン・ジョンソンも出入りしていた名門クラブです。そこでコリアトのように歩くことと詩作をうまく重ねて何とか自分も詩人として世に出たいと願う人が現れても何ら不思議ではありません。

テムズ川で渡し舟の船頭をしていたジョン・テイラー(1580-1653)という三文文士がそのような願望を抱きました。テイラーはコリアトのまねをし

て、歩くことを題材にして詩を書いたのです。『文無し巡礼』(1618)が歩行詩としてよく知られている。できあがった作品がいかに稚拙であれ、歩くことを詩作に結びつけるという伝統が徐々にではありますが育まれてきたことになります。そのように、歩くこと、詩作することを連動させて自己をつくりあげていく。自己実現という営為と歩行がこの時代に芽生え、18世紀末まで着実に根づいていくことになります。

ドイツの詩人 こうした伝統は何もイギリスに限った現象ではありませんでした。少し話は先にとびますが、自己実現を願い、ドイツにロマン主義が起きていた時代のことです。一人の文学青年がジョン・ミルトンという『失楽園』を書いたイギリスの大詩人にあこがれ、なんとか詩人の母国で『失楽園』を読みたいと強く願いました。懐のさびしいその青年は馬車に乗る金ももち合わせていませんので、歩いてイギリス国内を旅しようと思いました。克明な記録が旅行記(『1782年にあるドイツ人がした英国徒歩旅行』)にしるされています。その青年カール・フリップ・モリッツ(1757-93)の記録を見ますと、いかに当時、徒歩旅行者がイギリス社会から忌避され嫌がられていたかがわかります。

まず歩いてくるような旅人を泊めてくれるところは皆無です。もう疲れはてて、野宿にも飽き、お腹もすき、風呂にも入りたいためですから、何とか今晩だけは泊めてくれないかと宿屋の主人に哀願するのですが、宿の主人は頑として受け入れてくれません。ソファに横になるだけで一泊分払うからと懇願の限りを尽くしても、応じてはくれません。それくらい、歩いて旅をするということは1770年代80年代では、まだまだ認められない行動であったということがよく分かります。しかし、コリアトやテイラーと同様に、このドイツ人のモリッツもイギリスを歩くことによって、文学者として立とうという気持ちを強く抱き、それはミルトンの詩作品を読むことによってさらに強まり、ドイツロマン主義の大きな星の一つとなっていきます。

ウォーキング・スチュアート やがて歩くことが、18世紀末に隆盛をきわめるまで注目すべき人物が出現します。フランス革命のときにウォーキング・スチュアート(1747-1822)という人が現れます。この人は小さい頃から落ち着きがなくて、中学生のとき放校処分にあうくらい仕末におえません。父親はこんな子はだめだと思い軍隊へ入隊させま



図8 ウォーキング・スチュアート

す。やがてインドの軍隊を抜け出し、中近東の砂漠を越え、まだ地図に記載されていないエチオピアやコンゴまで入っていき、故国イギリスはロンドンまで歩いて帰ります。そのときはあまり旅費がないということもありましたけれど、世界を広く見てやろうというような、おそらく今日の若者のバックパッカーと同じような気持ちで歩き回ります。

スチュアートがフランス革命や動乱に必ず姿を現して、まだ大学生であったワーズワスなどに政治の大切さを説いた記録がのこされていますが、本人は戦争、戦争で明け暮れた世の中をみて、なんとか世界平和を説こうとする、なんとも奇特な願いを彼自身は胸に抱きつづけます。そこで自らの主張を訴えようとして世界中を歩き出すのですが、彼が歩を運んでいないところは、南米の一部と中国、日本くらいです。他の国はすべて歩きつくしました(図8)。アルメニア人のような頭巾を被って自らのパンフレットを売り、世界平和を説き、人間はなぜ戦争を起こすか、どうすれば闘争を避けることができるかを汲々と説教し、街角に立ちみずからの平和論を広めようとしてきました。

だがロンドンでは石を投げられ、変人扱いされ、自分の考えが受け入れられないことが分かって、カナダ、アメリカへ渡っていきます。当時のニューヨークで出た新聞も彼の到来を報道しています。有名人でもあったわけですが。しかし彼の説く平和論というのは奇怪きわまりなく、聴衆すべての耳目を集めるところまではいきません。パンフレットが売れなければ生活費はかせげない。どうしたら地球破滅

の日から人々を救うことができるか、等々と訴え何とか本を売ろうとします。歩きながら読めるように手帳くらいの大さの本が多く、自分の死期を悟ったとき、売れ残ったたくさん本を友人に託し、やがて英語は減びるから、これらをラテン語に訳して地中2メートルくらいのところに埋めてほしいと遺言し、彼は亡くなってしまいます。しかし、同時代の人々は、たえず歩きまわっていた奇妙な歩く哲人／鉄人>ジョン・<ウォーキング>・スチュアートを忘れることなく覚えていたそうです。

ジョン・テルウォール このように、何か自分の哲学的思索を説いて回った人に、もう一人忘れてはならないロマン派の詩人くずれの説教師がいます。ジョン・テルウォール(1764-1834)という人です。テルウォールは動乱きわまり政府が転覆するかもしれない、いつフランスが攻めてくるか分からないというような不安な世の中であって、政治がどうなるか、混迷の時代をどう生きるかというようなパンフレットを作って売るために、イギリス中を駆け巡ります。

そこで彼は面白いことを思いつきます。群集に向かって説教するわけですが、腹式呼吸と雄弁術がいかに結びついているかというささやかな発見をしました。呼吸法といわゆる英語の発声法との関係を書いて小さな本にまとめます。それが、イギリス最初の音声学の本だと言われています。国会議員たちの家庭教師をして、国会でいかにうまく演説するかということをお教え、収入を得ようとします。彼の弟子になった人はたくさんいました。また全国を歩き巡りながら、『イギリス逍遥記』(1793)という三巻本を書きあげます。どこで、どのような人と出会ってどのようなことを話題にしたかを詳細に記述しているのです。彼の政治的主張は残念ながら今日では受け容れられず検討もされませんが、彼の残した観察記録が盛り込まれた本書は、当時を知る得がたい社会的な記録となっています。

創作としての歩行

哲学的な思索をする歩行、やがては詩作をする歩行へと進んでいきます。イギリスの詩は、弱強というアイアンピックのリズムから織りなされていきます。それは英詩の基本的な韻律で、歩くリズムときわめて似たリズムなのです。アリストテレスの逍遥学派が、歩きながら思念に資するという思索をねる歩行を実践したのと同じように、イギリスのロマン

派詩人たちは歩きながら自然と語りあい、なおかつリズムを紡ぎだしていたのです。こうした内的な運動が歩行によって起きていたのと同時に、外的な出来事が歩くことに大きな変革をもたらそうとしていたのです。この感性の変遷はツーリズムと深くかわりあっていました。

風景画と庭園 グランドツアーという研修旅行ともいべき旅に出ているイギリス貴族の子弟たちは大陸文化の精髓を故国に持ち帰ります。珍重された絵画は、ニコラ・プッサン、サルヴァトーレ・ローザ、クロード・ロラン、ガスパール・デュケといった一世紀も前に流行したおどろおどろしい自然を描いた風景画家の作品でありました。本来ならばそこに描かれている廃墟や古城、荒廃した庭園なども持ち帰りたいたところですが、残念ながらそれはできません。そこで絵画とあいなるわけですが、この一連の絵が甚大な影響をイギリス文化にもたらします。

豊穡な大陸文化に対して、イギリスには文化的に誇るものがそれほどありませんでした。イタリア、ギリシア文化にねたみに近いほどの憧れを抱くのも無理からぬところですが、ところが、唯一、胸をはって声高にこの文化の粋を見よ、というものがありません。それは従来幾何学庭園に対して、巧みに自然をしつらえた「風景式庭園」です。この庭園文化は英国から発信され、アメリカ、モスクワまで「輸出」されました。それどころかギリシア、イタリアへと先祖帰りまで果たしたわけです。

この庭園文化がもたらした文化的余波は、何よりもイギリス本国をもっとも強く揺らしました。芸術全般にとっても過言ではありません。ナポレオン戦争のためにヨーロッパへ渡ることできなくなり、こうした風景画、庭園文化に育まれた感性は勢い自国へと向かいます。でも、いかにイギリス本国には荒ぶる自然がありません。そこで見出したのが湖水地方です。またウェールズを流れるワイ川流域でありました。グランドツアーの旅人たちが涵養した「眼」でもって自国スコットランドやウェールズの「荒々しい自然」を理想としてかかげたのであります。つまりツーリストたちはこぞってかつての巨匠たちが描いた、「風景画」に描かれた自然を求めて湖水地方などを彷徨しはじめました。

もうお気づきのように自然が芸術を生むのではなく、自然が芸術を模倣するといった逆転現象が起っていたのです。はじめに「風景画」が理想とし

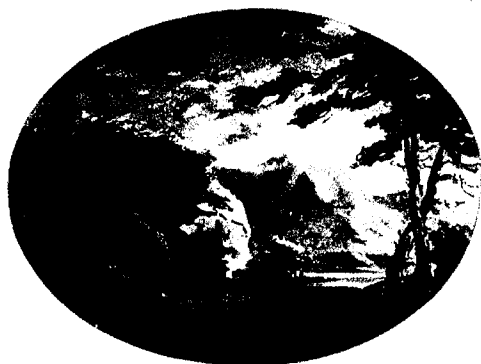


図9 <ピクチャレスク>美

てあり、それに即した「自然」を探求したからです。これが「ピクチャレスク」というイギリス独自の美意識です。当時、幹線道路は荷馬車で溢れていましたから、手つかずの自然のなかを人々は理想美を求めて野原や山中を歩き回りました。

<ピクチャレスク>の探究には欠かせないものがありました。クロードグラスです。画家の名前を冠したこの手鏡は、お気に入りの画家の色調に合わせて自然を見ることができます。今ここにお見せしている絵(図9)から分かりますように、最初からセピア色がかかった自然をつくって、それを鑑賞するわけです。今日からすればいとも奇妙な「自然鑑賞」ですが、ピクチャレスクツアーを生み出し、人々は山、森をさまよひ、「人工の美」を求めて歩き回りました。笑ってばかりはおれません。というのもここに現代の旅行の「原型」があることを認めるのは容易だからです——ガイドブックをつぶさに読み、いざ現地に赴き、私たちは「ああ、その通りだ」といって、旅の満足を覚えているからです。

ピクチャレスクツアー このピクチャレスクツアーという美意識は、政論家エドモンド・バーグ(1729-97)が称揚した崇高美「サブライム」という、恐怖から生じる美と密接な関係にあります(『崇高と美の観念の起源』[1757])。バーグの美意識はヨーロッパへも波及し、大哲学者カントに崇高美論を書かせました。そしてピクチャレスク美を喧伝した人は、ウィリアム・ギルピン(1724-1804)という教師・牧師でした。このアマチュア「審美家」は盛んにピクチャレスクツアーの本を書きまくり、フランス語、ドイツ語にまで翻訳され、<ピクチャレスク>美の一大教祖として祭り上げられます。

こうした人工的な操作を施した美意識ですから、人々の心に深く根ざすことはない、とほぼ予測され

るのですが、このピクチャレスクツアーから大きな影響を受けたのは、ほかならない「ロマン派の詩人」たちでありました。ワーズワス、コールリッジ、キーツ、シェリーという詩人たちは、若い頃、盛んにピクチャレスクツアーを試みて、自然のなかを逍遙しています。やがてこの<ピクチャレスク>美からの離反こそ自らの「詩人」としての旅立ちとなったわけです。

とりわけワーズワスと歩行の関係は無視できません。歩かずには詩作できないというくらい緊密なものでした。歩くことが詩のリズムを奏でていくという詩作の根源に根ざした営為となっていたからでしょうか。盟友のコールリッジなどは歩かなくなって以後、明らかにその作風に変化をきたしています。哲学者肌のコールリッジは自らの歩行と詩作の関係を丹念に「創作ノート」に書きつらねています。また、ワーズワスのもとを訪ねてきたロンドンの文学青年（トマス・ド・クインシーのことですが）が、詩人たちの猛烈な「歩きぶり」を目の当たりにして感嘆の声をかくそうとはしませんでした（『湖水地方と湖畔詩人の思い出』[1834-40]）。

湖水地方は歩行のコミュニティであったともいえるでしょう。ワーズワス兄妹は13マイル（20.8キロ）の距離を往復する（41.6キロ）ことを日課とするくらい苦も無く歩行していました。ウィリアム、ドロシー、コールリッジのもとへ遊びにきた詩人ロバート・サウジー（1774-1843）はたえず時速3マイル（時速4.8キロ）で歩き、しかも同時に読書できると主張し、本を閉じれば時速4マイル（時速6.4キロ）で歩いてみせると豪語しています。晩年の肥満体から想像できませんが、コールリッジはこうした誰よりも健脚を誇っていました。速度、距離においていささかも劣らない活力でもって、湖水地方に群がった文筆家の誰よりもすばらしい脚力をそなえていたのです。

ロマン派詩人たちがワーズワスを中心に集まり、自然の中を大いに歩きまわった記録は、詩人たちの追憶記、書簡、日記、備忘録などに詳細に記録されています。そのなかでもコールリッジの場合は検討に値します。「歩行した」という具体的な事実にくれられて、それが詩作品と結びついているからです。

イギリス詩の革命的な詩集となった『抒情詩集』を、ふたりして共著で世に問うた翌年の1799年11月、ノーサンバーランドからダービシャーへ南北に連なる高地ペナイン山脈を横切って、湖水地方を

コールリッジに実体験してもらおうべく、ワーズワスは彼を誘います。この歩行旅行は両詩人にとって大いなる意義をもつわけです。道中でワーズワスはその後数年滞在することになる「ダヴ・コテッジ」という家屋を見出します。雨をも厭わず、歩行をつけ自然を絶賛する一方、ウィンダーミア湖畔に群生しはじめた醜い新建造物に嫌悪の情をぶつけました。

荒涼とした自然に初めて接したコールリッジは、その感激を「未知の風景美にどれほど私が感銘を受けたか、とうてい、いや絶対に私の感銘は表現できません」と、ワーズワスの妹ドロシーへつつみ隠さず伝えていきます。同時期に自らの印象を記した『ノートブック』には、「霧のなか踊る陽光、プラトンの光る陰鬱…」と書きしるし、歩行から得た印象が変容ををはじめ、詩的言語へと昇化されつつある過程が理解できるのです。これほど歩行とく詩作・思索が混然一体となっていく悦ばしい例はじつに稀です。

歩く女性 こうした詩と歩行の関係をさぐるとき、逸してならないのはワーズワスの妹ドロシーの存在です。ドロシーは兄ウィリアムと同居して身近に詩作を見届けた人でもあります。ドロシーが残した日記を見ると、「歩かない日」がまず見当たらないくらいこの兄と妹は「歩く人」でありました。ドロシーは兄の観察者だけではありません。ワーズワスの詩とドロシーの日記を比較してみると、日記がもたくなって詩作されたような作品が散見できます。

雨が降ろうが歩くことを止めなかったドロシーは、同時に、女性として歩く意義を高らかに宣言した輝かしい人でもありました。男性でも歩き回ることがはばかれる時代に、ドロシーは山中、森林を好んで彷徨しました。こうした女性としてのあるまじき態度を見かねた叔母がドロシーに歩くことを諫める手紙を書きました。

ドロシーの返信の中に込められた「反逆の声」こそ、歩行の新しい時代の到来を告げるものでありました——「叔母様、どうして歩くことがそんなにいけないのですか？ 神様がすばらしい身体を与えてくれたというのに、そしてこんなにすがすがしい自然につつまれているというのに。どうして歩くことが反社会的だと言われなくてははいけないのでしょうか」（1794年12月）。いつも内気で自分を前面に押し出そうとはしなかったドロシーとしては異例といっていっくらの自己主張です。そしてこのドロシー

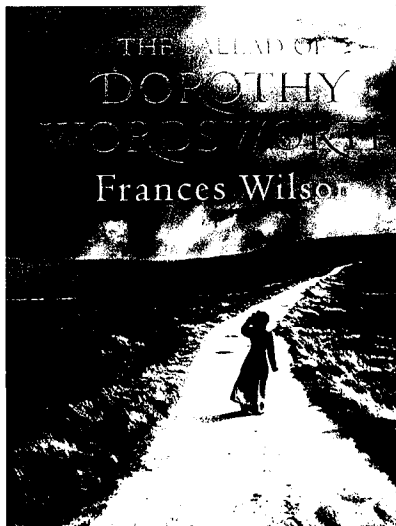


図10 『ドロシー・ワーズワス』

の声は、女性が歩きだすという大きな一歩を与える声となったのは歴史的にみても首肯できます。ドロシーの歩行生活を再現したノンフィクションがオックスフォード滞在中に小さなベストセラーになって評判を呼んでいました（図10）。

まだハイキングという言葉もありませんでした（この単語が英語に流入したのは1865年のことです）。ピクニックという言葉はあるにはありましたが、今日のように野原を歩き回ることを含意していませんでした。ドロシーよりも少しさかのぼる、小説家ジェーン・オースティンの時代では、ピクニックは「家のなか」で行われるパーティを意味していました（言葉自体はフランス語から1748年に英語に移入された）。

歩行が反社会的な行動であると考えられていたがゆえに、ロマン派の詩人たちはあえてこぞって歩いたという一面は否定できません。反社会的な行為として知りつつ、実践することは既存社会の価値観を転倒させてみせる示威行動であったからにはほかなりません。いわば詩人たちが歩き回ったのも、こうした時代のコンテクストを想定すれば理解できます。歩きまわり黒く日焼けした肌をしたドロシーを、フランケンシュタインの物語を書いたメアリー・シェリーとともに女性解放をうながしたフェミニストのひとりであると見なすのもあながち妥当性を欠いていないと非難できないであります。

大都市ロンドンを歩く

これは不思議な現象なのですが、都市化が進行

し、田園に人々が関心を抱きはじめていた頃、ほぼ同時に芥のかたまりとみなされていた都市に対して、同様な関心が集まりだし、都市を逍遥する、彷徨する、徘徊するといった「都市歩き」の伝統が、新たにこの時期に生まれてきます。20世紀の文学的総決算ともいえるジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』（1922）はまさにこの伝統にくみしたものです。やがて女性が街を散策し、ウィンドー・ショッピングが発生してくるような文化現象を生み出してくるこうした現象はいかにして生まれたのでしょうか。

このような動向を伝える記念碑的な作品があります。ジョン・ゲイ（1685-1732）の『トリヴィア—ロンドン街路歩行術』（1716）は、「歩行詩」の典型とでも言ってよい作品で、都会生活に慣れた先達が語り手になって、地方から都会へ上京してくる新参者に対して、危険と誘惑に満ちたロンドンの街路の歩き方を、また同時にそのあふれる魅力を伝えようとするのです。当時、アムステルダムをぬき世界に冠たる大都市になったロンドンの〈光と闇〉を同時に開示した詩作品といえるでしょう。

また一面、『トリヴィア』は、17世紀後半から18世紀初頭の世界都市に台頭してきたロンドンの姿を描いているだけではなく、古代ローマの「路地」をも描写しているのです。というよりも、古代ローマと現代ロンドンという二大都市を〈平行化／重層化〉させて、両者をインターテキスト関係におき、テキストとテキストとの交響をかなでてみせることで新しい「文学的な」都市を創造しようとさえ意図しているのです。

まずタイトルに着目してみましょう（図11）。『トリヴィア』とは、ラテン語で「三叉路」を意味しますが、同時にこの語はギリシアの女神ヘテカーを表わしています。他のギリシアの神々と同様にヘテカーには二面性が付与されています。呪術と生命・出産をつかさどる創造神なのです。前者としての存在は、夜の都会の十字路などに姿を現し、妖怪のような威圧感を示し、魔女そのものであり、黒魔術の本尊として崇められます。このタイトルからゲイが意図しようとしたことが明らかになってきます。18世紀初頭のロンドンもまさにこの呪術をふるう魔術師と創造の女神が同時に君臨する場に他ならなかった、ということです。

そして詩のなかで頻出するローマの詩人たちの作品への言及・引用・暗示が私の論点を補強してくれるでしょう。エピグラムとして引用されているウェ

TRIVIA:

OR, THE
ART of WALKING
THE
STREETS of LONDON.

By Mr. GAY.

Quo te Maris pedes? An, quo via ducit, in Orbem?
Vug.



LONDON:
Printed for Bernard Lintott, at the Craft-Kop
between the Temple Gates in Fleetstreet.

図11 「トリヴィア」

ルギウスの『牧歌』をはじめ、ホラティウス、ユヴェナリス、オヴィディウス、ホーマーなどの教訓詩、牧歌、叙事詩などがあふれ、まさに総体としての詩は、古典詩の「織りもの」そのものと称してもいいでしょう。

ここにいたり、『トリヴィア』の構成からゲイの詩的な意図もはっきりしてきます。この詩を単なる都市へのガイドブックにするのではなく、偉大な古代ローマより脈々と流れる詩の伝統の末尾につなげることで、自らの英詩の伝統をより活性化しようとしていたのです。だから『トリヴィア』を読むことは「現在ロンドンの街々」と同時に、「古代ローマの街々」を歩くことになるのです。いわば詩による「歴史的逍遙」とも言い換えられるでしょう（図12）。

ゲイが醸成した歩行文学はその後、綿々とイギリス文学の豊かな脈を形成していきます。

ワーズワスは『序曲』（1805）のなかで、「セント



図12 ロンドンの街頭

ポール大寺院の目もくらむような尖塔、ウェストミンスター墓地、ギルドホールの巨人像、ベドラム精神病院……無数の街路」が縦横にめぐるロンドンの街のなかに、若き日の「名市長となるホイットントンが意気消沈して石畳にすわりこんでいる」（第7篇）姿を彷彿とさせている。またトマス・ド・クインシーは『阿片常用者の告白』（1822）のなかで自己を仮託した歩きまわる主人公を雑踏にまぎれさせることで、心身をさいなむ憂鬱症から逃れるくだりを語り、ジャーナリスト、リー・ハント（1784-1859）は、「塵芥舞う日」のロンドンの雑踏を活写し、小説家ヘンリー・ジェイムズ（1843-1916）は、「霧雨そぼ降る現代の魔界バビロン（ロンドン）」のなかで歩を進めながらこの大都市を観察しています。

最後にこの都市歩きが現代思想に肥沃な見解を与えている事例を紹介しておきましょう。都市を歩くことで観察を下し、自らが同化し、よりとぎすまされた眼で群生する都市生活者をとらえる「まなざし」は、詩人ボードレルの目を通して帝都パリの姿を回想し、自らの思惟のなかに都市を再創造させる契機として観察する歩行者〈フラヌール〉を想定した思索家ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）のそれと酷似しています。『パサー・ジュ論』のなかにはディケンズの歩く作中人物を克明にたどろうとする思索家の姿を見い出せるでしょう。ロンドンとパリを「歩行」で結びつけることで、ベンヤミンは自らの都市論＝夢を展開していたのです。

ペDESTリアニズム

だが歩行を〈思索／詩作〉するための一助としてとらえる方向とはまったく異なる形態の歩行がヴィクトリア朝にまだならない19世紀初頭に興隆をきわめるようになります。歩くことによって精神性よりも肉体・身体性を誇示するような耐久競歩ともいえる「ペDESTリアニズム」がロンドンを中心に、やがて国中に流行していくようになります。

ヴィクトリア朝時代になっていっそう盛んになっていく運動ですが、歩行がこれほど身体性を誇示したことはありませんでした。こうした歩く人、とりわけ競技者をペDESTリアンといいました。多くは労働者階級、下層階級の人たちが多かったのですが、こうしたペDESTリアンの一群には所属しない一大スターが登場してきます。キャプテン・パークレー（1732-97）その人です（図13）。パークレーは、現在も盛業中のパークレー銀行の末裔につなが



図13 キャプテン・パークレー

る由緒正しい出自であり、そしてパークレー一族は古くから肉体を誇示した家系でもありました。

パークレー・マッチ　パークレーが他のペDESTリアンたちと異なったのは、軍人であったという点です。「キャプテン」という呼称はそこからきています。彼を有名にしたのは、1000マイルを1000時間かけて、1000ギニーという天文学的な額の賞金獲得に覇をかけるという「世紀の戦い」でした。

パークレー・マッチと呼称された戦いは、ほぼ1600キロの距離をふたりの競歩者のあいだで競われます。想像されるように昼間は歩き、夜間は就寝するというようなレースではありません。24時間すべてを活用して、歩き続けるというものです。つまり1時間のうちに1マイルを歩き、休憩を挟むという歩行です。具体的にいいますと、たとえば、出発時間は午前1時1分、ほぼ1マイル1600メートル歩いて1時18分に目的地に着きます。イギリスの道路は正確にマイル標が設置されていますから、厳密に距離は測定されています。そして、午前2時まで身体を休めて、2時からまた歩き始めます。

パークレーの記録——全記録が克明に残っていて驚かされるのですが——を見ると、じつに規則正しくこの周期をくりかえしていきます。1000マイルをほぼ42日間かけて踏破しました。就寝、食事などすべて日常生活もこのレースのなかに含まれています。競技中に摂った食事から飲み物まで記録されているのですが、チキンの冷肉を食し、ビールやワインを傾けている日も珍しくありません。夜中の2時、3時、4時、明け方の5時、6時、7時……というように1600メートルの距離をほぼ16分から18分

かけて歩いていくわけです。これを合算すると一日24マイル歩き、296時間延べ42日間かけてパークレーは1000マイル歩き抜きました。対抗者は早々に脱落し、パークレーひとりの闘いであったのです。

レースが行われた当日の天候も明確に記されています。雨が降ろうが、強風が吹こうが、レースは続行されました。夏で、熱気が競技者に与える影響は相当なものであったと想像されます。

イギリスはギャンブル好きのお国柄ですから、当然、このパークレー・レースも賭けの対象となりました。国中が注目し、国王までパークレーに賭けたと言われています。『タイムズ』紙には毎日、前日の記録が伝えられました。ここにお見せするのは、社会風俗の描写に絶妙の筆のさえを発揮したトマス・ローランドソンという風刺画家がパークレー・レースのゴール直前をとらえた戯画です。このカリカチュアを見れば当時の興奮が如実に伝わってきます(図14)。さわいでいる農夫やサンドウィッチやワインを手にして、パークレーの競歩を愉んでいる者もいれば、高みの見物を決め込んでいる見学者もいます。大切なことはここにほぼ全階級の人々が集まっている点です。超然とした傍観者などだれ一人



図14　パークレーのゴールイン

といません。つまりイギリス国民がこぞって注視していた一大イベントであったことがわかるのです。パークレー自身もこのような好奇の目を十分に意識していました。フランネルに身をつつみ、ストッキングをさり気なくあしらったスタイルはあくまでも「ダンディ」であります。道路は、彼にとって「舞台」でもあったわけです。

この歩行競技を闘いぬいたその日に、パークレーはドーヴァーに繋留していた軍艦に舞い戻り、対フランス戦争に参戦していきました。彼が軍人であったことはいたく国民の胸をうちました。

ペDESTリアンの群像 当然、多くの追従者が生まれました。パークレーを模倣するペDESTリアンが国中にあふれました。そうしたペDESTリアンはかならず自分自身の記録を記載した小冊子を作成しています。それを参照しますと、かならず伝記をそえています。そこに記載されている事項を検討してみると、パークレーのような身分のものは皆無です。ほとんどが低所得者で社会的身分の低い人々ばかりです。自らの足で有能さを示し、一財産をきづこうとした者ばかりなのです。

このようにペDESTリアニズムが賭けの対象となっていくにつれて、品性、道徳を重視するヴィクトリア朝時代のエートス（風潮）に合うわけはありません。その結果、批判にさらされたペDESTリアニズムは次第に終息してしまいます。パークレー自身もボクサーの育成などの仕事を手がけた後、馭馬車事業にのりだし、馬にわき腹をけられて、それがもとで亡くなりました。とは言ってもパークレーは、国民的な英雄でしたから、国家的事業として出版された『英国人名辞典』に掲載されています。その項目を執筆したのがレズリー・スティーヴン（1832-1904）です。ヴィクトリア朝を代表する思想家です。小説家ヴァージニア・ウルフの父親であり、小説『燈台へ』のラムジー氏のモデルとさえいいのでしょうか。スティーヴンはその項目のなかで「精神性を追求せずに、身体性に傾いた」パークレーの歩行を、「歩行の本来の意義」から大きくはづれるものとして、退けます（図15）。

スティーヴンの歩行 なぜ拒否したかというと、スティーヴンこそ「歩くこと」に精神性を深く求め



図15 レズリー・スティーヴン

た人であったからです。彼はすぐれた歩く人でありました。幼少の頃からよく歩いたのですが、ケンブリッジ大学に在籍中、ボート部に属していて、ロンドンの会合に出席する際、ケンブリッジ＝ロンドン間を歩くことをまったく厭いませんでした。ロンドンで食事を終え、また歩いてケンブリッジへ戻るといふ「遠征」も珍しくありません。やがて、スティーヴンは、神の存在を人知の超えるところにあるとして、宗教的な立場としては不可知論という態度をとります。当然、宣誓できないので、教育者として大学に残ることはできません。そこでロンドンでジャーナリストとして身を立てることとなり、伝記、哲学、道徳などに関する幅広い分野で著述をこなし、『コーンヒル・マガジン』という雑誌の編集にも携わります。ヴィクトリア朝を代表するジャーナリストになるのですが、そうした時、彼の歩く日々には大きな転機が訪れます。

アルピニズムの勃興 すでにイギリスではアルプスの山々を登攀する登山熱が浸透していました。1840年代、スイスに鉄道が敷設され、時間、費用の両面で大幅に軽減されました。1857年、アルペン・クラブが設立され、スティーヴンは会長になります。当時の登山者は、アルペンストックとロープだけの装備で、軽装のまま断崖絶壁に挑戦していくわけでした。女性も最初は氷河見物から始まり、やがて登山をするようになります。登山中の長いスカート姿にはただ驚かされるばかりです。

言うまでもなくスティーヴンは神に一步近づぐために歩を山頂へと進めました。だから初登頂をもくろむ多くの登山者とはまったく異なっていました。また、スティーヴンを含む同時代の不可知論者たちが登山に熱中したのは面白い現象です。

アルバート・スミス ここでイギリスのアルプス熱にもふれておきましょう。というのも歩行が文化現象と絡まって、興味深い事象を生み出すからです。アルプスを人々に近づけた人にアルバート・スミス（1816-60）がいます（図16）。彼は最初、医者志望だったのですがジャーナリストになり、『パンチ』誌などに健筆をふるうようになります。幼少の頃、『シャモニーの農夫』という牧歌的なアルプスを描いた本を親からもらいました。そこには理想的なアルカディアが広がっていたのですが、同時に悲痛な遭難事件も生々しく描かれていました。スミスは、平和のなかにひそむ突然の死という構図をしつかりと胸にきざみ、後年この二項対立を巧みに駆使



図16 アルバート・スミス

して、一大パノラマ『モンブラン・ショー』をロンドンっ子のまえにくりひろげてみせたわけです。

アルピニズムの諸相

スミスが目標とし、謳いあげた山は「山岳の王」と言われていたモンブランです。みずからも「アルバート大王」と自称するくらいに矜持があったのか、「山の王」を征服しようと思立ち、ついに決行する日が来ました。1851年8月12日のことです。仔羊の脚肉四、羊の肩肉四、仔牛肉六片、牛肉半頭分、鳥肉十一、鶏肉三十五そしてパン二十塊、棒状チョコレート6ポンド、チーズ十塊さらに干しモモ6箱を、シャンペン、ワイン、ビールなどの飲料水とともに案内人20人の背中に背負わせてモンブランの斜面を登っていきました。晴れ間をみて、ついにスミスはモンブラン山頂に登り切ります。歓びを爆発させ、山頂で盛大なパーティが催されました(図



図17 モンブラン山頂での乾杯

17)。だが、猛烈な眠気に襲われ、つい目を閉じてしまい、次に目を開けたとき、大雪原が広がっていて山頂にいる充実感に包まれたというわけです。

スミス一行の登攀を麓のホテルから多くの人々が望遠鏡で眺めていました。下山してみると、モンブラン征服を祝う大祝宴会がまちかまえていて、さらに一週間後にはスミス自らが書いた「登攀記」が『タイムズ』の紙面を飾りました。登る前からすでに登攀の記事を書いていたのでしょう。ヴィクトリア朝最大の興行師、スミスは何事にも機をみるに敏なジャーナリストであったわけです。

パノラマ『モンブラン・ショー』 翌年1852年3月、ロンドンの中心地ピカデリーにあるエジプシャン・ホールでついにスミスは『モンブラン・ショー』の興行を立ち上げます。シャモニーにあるスイス風山小屋を舞台上につくり、ロンドンを旅立ってからモンブランに登り、下山するまでの様子を彼が講談師となって語るのであります(図18)。聴いている人々

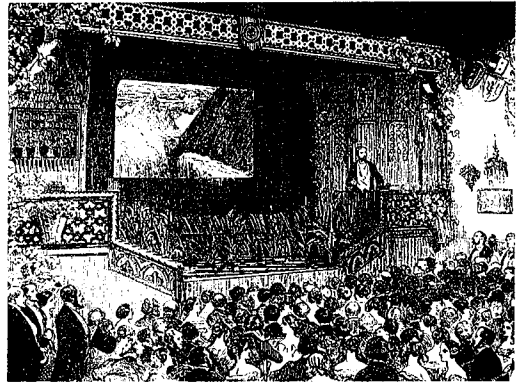


図18 講演中のスミス

は、ヨーロッパ旅行をし、モンブランの斜面に立つという「追体験」をするわけです。娯楽と教養が一体となったヴィクトリア朝好みの「見世物」に仕立て上げたわけです。ヴィクトリア女王や夫君のアルバート殿下をまえにしての天覧興行も華々しく打たれ、モンブラン・ショーは大成功をおさめます。6年間ものロングランとなり、30万人の観客を興奮の坩堝で酔わせました。細部の演出にも凝っていて、当時、イギリスにはまだいなかったセントバーナード犬を二頭会場に連れ込み、首からぶら下げたかごにチョコレートを入れて客席を巡回させたのです。このうちの一頭をヴィクトリア女王に、もう一頭を小説家チャールズ・ディケンズに献呈したという後日談まで語られることになります。モンブラン、つ

まりアルプスをイギリス人の意識のなかに植えつけた功績はスミスにあります。

『アルプス登攀記』 1857年にはアルペンクラブが設立され、いわゆるイギリス登山界は黄金期を迎えようとしています。そうした隆盛をきわめている最中にエドワード・ウィンパーのマッターホルンの悲劇が起こります。アルプスの頂はほとんど征服されてしまっていたのですが、ガラスの絶壁といわれたマッターホルンは未登頂でした。

1865年7月15日、ウィンパーを含む8名の登山家が山頂へ向いました。「巨大な自然の階段」を這うように登っていき、「頂上までわずか200フィートほどの優しい雪」を踏みしめてついに山頂にたどり着いたわけです——「もうロープをはずしても差しつかえなくなったので、ガイドのクローと私は、ロープをはずし、先を争いながら駆け出した。そしてほとんど同時に山頂に登りついた。午後1時40分であった。ついに頂上に立ったのだ。マッターホルンは征服されたのだ。雪の上にはひとつの足跡もなかった。」ウィンパーの一行は、「すべての山々が目の前にあり、アルプスの山で見えないものはないくらい」の眺望を楽しみ、「輝かしき生涯を圧縮したようなひととき」を味わいました。

ところが下山の時に悲劇が襲うのであります。岩場の急斜面から人間が転がり落ちていく様をウィンパーはスローモーションフィルムを撮っているかのように冷静に描いています——「その瞬間に、ハドゥが足を滑らしたのだ。クローの背なかにぶつかり、彼を突き落としてしまった。クローが驚きの叫び声を上げるのを聞いた。そしてクローとハドゥが、飛び落ちていくのが見えた。次の瞬間には、ハドゥソンが引きずり落とされた。それと同時に、フランシス・ダグラス卿も落ちていった。すべては一瞬のうちの出来事であった。クローの叫び声を聞いたとき、老ペーテルと私は、足場の岩の上に、しっかりと足をふん張った。老ペーテルと私の間は、ロープがびんと張っていた。だから衝撃は私たち二人に、まるで一人の人間に襲いかかるように、ぐうんとやってきた。私たちは、ロープを食い止めることができた。しかし、そのロープは、老ペーテルとフランシス・ダグラス卿との間で、ぶつりと切れてしまった。ほんの数秒の間、私たちの仲間が、仰向きになり、両腕をひろげ、何かにつかまろうともがきながら、滑り落ちていくのが見えた(図19)。見えている間は、まだ一人も負傷していなかった。一人ず



図19 墜落

つ視界から消え去っていった。四千フィートもの下のマッターホルン氷河へ、断崖から断崖へと飛ばされながら落ちていったのだ。ロープが切れた瞬間に、救うことは絶望になったのであった。」

この遭難事件はイギリス本国でも大騒ぎを起こし、女王は「なぜ登山でイギリスの有能な若者の命が失われなければならないのか」との疑念を示し、登山禁止令を出す寸前のところまでいたりしました。

ウィンパーの無念さは、自らの登攀記の「マッターホルンの初登攀」の章につけた、ユーリピデスの「うまく成功しさえすれば立派な人物のうちに数えられる。人は物事を結果から判断しがちである」という警句から窺えます。『アルプス登攀記』は山岳文学の傑作とされ、高い評価を今日まで受けています。だが、この本を『アルペン・ジャーナル』で書評したスティーヴンは大方とは違う評価を突きつけました。「こんな不用意な登山でもっと早くに遭難していた」と非難し、ウィンパーの登山者としての心構えをいさめています(図20)。

歩くという行為が山へ向かったとき、命を失う危険に直面します。ウィンパーが述べ懐する言葉——「あの最後の悲しい記憶が私のまわりに漂いつづけている。流れていく霧のように日の光をさえぎり、楽しかった思い出さえ凍らせてしまう。言葉では言い尽くせないほどの大きな欲びも数多くあった。それとともに思い出しても苦しくなる悲しみもあった。これら一切のことを顧みてもなお私は、山へ登りたいというなら、登りなさいと言いたい。ただし、勇気と力があっても慎重さを欠いていたらそれ

は無に等しいということを忘れて欲しい、そして一瞬の不注意が一生の幸福を破滅に陥れるものであることも忘れてほしい」——は、まさにステューヴンの訓告を裏打ちしています。そして、「何ごとともあわててやってはならない。一歩一歩をしっかりと踏みしめて、つねに最初から、終わりがどうなるか、よく考えて行動してほしい」という自戒をこめて、この名著は閉じられるのですが、歩行がまさに人生の一歩であるという人間らしい生き方を表す比喩でもって表現されています(図21)。

日曜遊歩会 「歩行の文化史」をたどるために、もう一度ステューヴンの後半生に話をもどしましょう。ステューヴンが後半生にたどった歩行は、今日



図20 ステューヴン(右)



図21 ウィンバー

のウォーキングときわめて似た様相を呈してきて、私たちの歩行に指針を与えてくれます。

雑誌の編集長を辞した彼のもとに国家的な事業とも思える『英国人名辞典』の計画がもたらされます。この一大事と並行しながら歩行もつづいていくのです。アルプス登山に行く時間的余裕もなく、体力の衰えをみたステューヴンは隔週に一度、ロンドン郊外へ汽車で行き、また都心へ歩いてもどってくるという、「日曜遊歩会」(The Sunday Tramps)という集いを結成しました。

参加者には時代を代表する知識人が集まり、いわば歩きながら知の論議を重ねていきました。アリストテレスの逍遙学派とよく似た側面があります。この知的交流の会に加わった人々には、法律家フレデリック・ポロック、『マインド』の初代編集長クルーム・ロバートソン、法律家F. W. メイトランド、英文学者W. P. ケア、詩人ロバート・ブリッジスなどの錚錚たる知識人がひしめきあっていました。15年間で252回の遠征がなされましたが、ステューヴンは、素晴らしい「ガイド」役を果たしつづけたのです。名所旧跡を訪れ、歴史的薫りを感じるといった文化的営為にとどまらず、この会にはイデオロギー的な示唆も含まれていました。安息日である日曜日をことさら選び、運動に興じてみせるのははなはだ反社会的とみなされても仕方がなかったわけです。とくに人々がこぞって礼拝している時間に堂々と教会の前を闊歩していくのは一種の示威行動以外の何ものでもありませんでした。

知的交流 記念すべき100回目の遊歩会では、ダーウィンの邸宅に寄り、記念すべきディナーを摂っています。小説家ジョージ・メレディスは、「この会に誰か速記者がついて、交わされる話を書き留めておいたら後世に資するところ大であろう」(「レズリー・ステューヴン追悼記」[1905])と、この会を評価しています。日曜遊歩会は、ステューヴン亡き後も、歴史家G. M. トレヴェリアンたちが衣鉢を継いで発展させていき、歩行と知の関係がたえることはありませんでした。

ただここで注意しておかなくてはならないのは、この時期にウォーキングを実践していたのは何もステューヴンの日曜遊歩会だけではありませんでした。イギリス各地にこのような歩行を中心にした同好会が出現しその活動を盛んに展開していたことを忘れてはなりません。それは単に歩き続けるというだけでなく、目的地まで自転車で、または自動車で

行きそこで歩行を愉しむというような形態に姿を変えていきます。19世紀末にはサイクリング熱がイギリス全土を支配しますが、それと同時にウォーキングも盛んに行われていたのです。

ウォーキング・エッセイの流行

歩く牧師 市民生活のなかに定着したウォーキング活動はまず文学の領域で開花することになります。ヴィクトリア朝に多くの山岳登山書が書かれたように(図22)、19世紀末から20世紀中葉にかけて、じつに多くのウォーキング・エッセイが書かれ、イギリス文学のお家芸であるエッセイ部門をにぎわせます。アメリカでは『森の生活』、『市民の反抗』を書いたH. D. ソロー(1817-63)が自然のなかを歩くことが自然保護の一行為であると標榜し、歩行に意義を認めています。ソローのいうウォーキングはソタニング(散策)の異名できわめて宗教色の濃いものでありました。「中世の頃、田舎をさまよい聖地におもむく(à la Sainte Terre)という口実のもと物乞いをして歩きまわっている」人を、子供たちが「聖地に行く人=怠け者」と呼んだことからソタニングという言葉は生まれてきた、とソローは説明しています(『ウォーキング』[1862])。

このソローのようにウォーキングを一種の宗教的擬似行為とみなし、自ら実践して、ウォーキングの素晴らしさを説いた「歩く牧師、ウォーキング・パーソン」(the Walking Parson)がいました。本名はA. N. クーパーと言いますが、ウォーキング啓蒙の書を多く書きつらね、下層階級の人々の間にも「歩く

愉び」を流布させようと活動を続けてきました。といっても文筆業をなりわいにしていたというわけではありません。長い距離をめざして歩き抜くというのがクーパーの信条であり、その結果、それを伝達すべく多くの本を書いたというわけです。

ジョン・ラスキンがその『ヴェニス石』のなかで古きよき旅が絶滅したと嘆いているのに異議を唱えようと、多くの先人にならい、歩いて永遠の都ローマへ向かい、歩く旅の実践例を世に問います。サイクリングがクーパーの時代に大流行していたのも見逃せません。人々がスピードに酔い、筋力が退化することを憂いました。人間はもっと道を歩き、大地と接する必要があるとスピード万能の時代に警鐘を打ちならした、というわけです。

杖1本だけをたずさえて、少額の金を三箇所に分散させて懐中におさめ、軽装でイギリス国内を歩きまわり、ヨーロッパ大陸の方へも足をのぼし、ほぼ30年以上にわたり、クーパーはウォーキングの効用を歩きながら広めていきました。靴製造会社とタイアップするという世俗に長けた実務的な一面もそなえていた憎めない牧師は、『ウォーキング・パーソンの散策』(1902)、『ナップサックを背に、ノートを手』(1906)、『長距離歩行のすすめ』(1907)、『歩行の教え』(1909)、『教育としてのウォーキング』(1910)等々、陸続とウォーキング本を出版し、ウォーキング啓蒙に大いに寄与しました(図23)。

鉄道旅行が日常風景に取り込まれた時代とはいえ、旅行は一般庶民にはまだ手をのぼせるころにはありませんでした。費用のかかる海外旅行もクーパーは歩いていくことを勧めました。費用、健康の面からも一挙両得というわけです。ウォーキングツアーをしている間、生活は一日6ペンスの範囲で営むべきであるという質素を旨とする、クーパーの信条は、大英帝国を支える精神性ともなった、頑強な肉体に健全な精神が宿るとした「マスキュラー・クリスチャニティ」ともつながっていたのです。まさに歩く牧師はその信条を体現していた人物にほかなりません。

「私のように、いつも黒い正装に身をつつみ、食事のときにはナブキンとフィンガーボールを欠かさない生活を強いられている人々にこそ、私は道路で謳歌する自由を推奨したい。私たちがおくっている生活はきわめて人工的なものであり、それゆえに自然にもどり、自然に即した生き方をすることはいっそう愉快になるのだ」と、歩く牧師クーパーは高ら

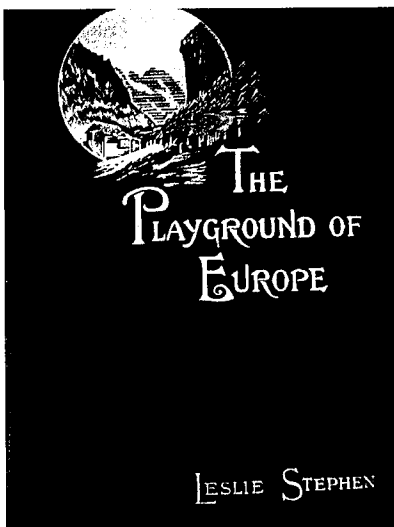


図22 スティーヴンの山岳書

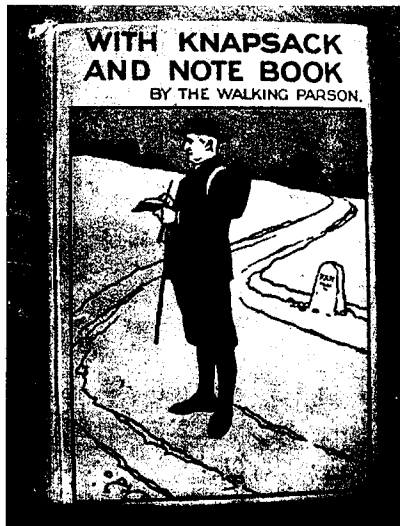


図23 歩く牧師

かに宣言しています。人工的な生活を営まざるをえない都市生活者にこうしたメッセージは強く訴える力があつたと思わざるをえません。

カントリーサイドを歩く 田園、田舎というカントリーサイドを歩きまわる情熱は、社会的地位、職種の違いを無化にして、とりわけ都市居住者に共通してみられる現象です。たしかに母なる自然は、工業、産業のこれまでにない人間性を否定して無視しようとする傾向、産業化の帰結である都市の不潔さと対比され、大いにその存在理由を主張しはじめました。＜汚れた都市／神聖な田園＞の対比という、昔ながらのアルカディア神話がここでも復活してきたわけです。そして同時に個人そのものにも根ざしていた、ヴィクトリア朝の時代精神ともいえる自己向上の要求——艱難こそ汝を玉にする、というサムエル・スマイルズの自助をうたう精神——もウォーキング運動の活性化を支えたイデオロギーのひとつと考えてもいいでしょう。

ウォーキング・パーソンの活動はささやかな一例にしかすぎませんでしたが、歩くことへの関心が社会一般に浸透していきました。男女問わず野原を遊歩する団体や男性だけに限定した山路を歩くウォーキング・グループが全国的な規模で組織されだしました。1903年に生まれたマンチェスター・ペデストリアン・クラブは、そのなかでも最大の規模を誇り有名な団体となります（図24）。

フットパス 歩行目的はともあれ、多くの市民たちが森林、田園、田舎などに自然を求めて歩きだしたことが思わぬ文化の波を引き起こしていたので



図24 ウォーキング・クラブ

す。とりわけロンドン郊外をロンドン市民が逍遙しはじめたのは、何よりも注目に値します。この波は古来より綿々とつづく土地制度にも改革をもたらし、土地所有の問題から余暇のあり方にまで影響を及ぼしていきました。

イギリスの街を歩いていると方々に「フットパス」という標識を目にします（図25）。この小さな標示板には、歴史的な意味が深く、雄弁に封じ込められているのです。緑化運動、自然保護、土地制度、余暇活用などのキーワードがたちまち浮き上がってきます。とりわけパブリック・フットパスは森や野原の自然道を、畑や牧草地の畦道を市民が歩くことができる「歩く権利」(the right of way)を認められた歩道であります。さて世界に誇るこのような権利はどのようにして生まれてきたのでしょうか。

「歩く権利」 土地所有者とその土地を横切っていく歩行者が衝突し、一悶着起きるのは自明です。対立する権利同志がぶつかり合うのですから当然でしょう。公的な土地ならばいざ知らず、私的所有の土地にさえ、この「歩く権利」は認められています。まずこのイギリス特有の「歩く権利」は、複雑な過



図25 フットパスの標識

程をえて生み出されてきた歴史的事実を知らなくてはいけません。

試みに陰鬱な想像をしてみてください——ハムステッドヒースやエッピングフォレスト、ウインブルドン・コモنزのないロンドン、ニューフォレストのないハンプシャー、ダートムーアのないデウォンシャー、ミンシンハンプトン・コモنزやペインズウィックビーコンのないコッツウォルド等々を。イギリス全土から自然を楽しむパブリックパスがすべて消滅してしまったら、果たして「イギリス的風景」は存在したでしょうか。歩くという精神性がかえりみられなければ、おそらく目を覆いたい黙示録が現出していたであらう。

産業改革がもたらした激変は、19世紀急増した人口数と田舎から都市への人口移動にともない、人々に閉塞感をもたらしていました。貧富の差、人口過密などの都市問題が日常化してきたため、レクリエーションの必要が緊急でした。人々は新鮮な空気を求めていたのです。歩くためにガイドブックが数多く書かれました(図26)。

こうした公害が生じさせた混迷をきわめた現状を打破するため、「オープン・スペース運動」(The Commons, Open Spaces and Foot Paths Preservation Society)が生まれてきました。人々のレクリエーションのため、土地(コモنز)、運動場、公園、そして何よりもカントリーサイドを確保するため人々は立ち上がったのです。この運動の原動力になったのが「歩行」であったのは興味深いことです。

運動を強く推したグループにコモنز保存協会

(the Commons Preservation Society)がありました。レディング選出の国家議員であった急進主義者ジョージ・ショウ＝ルフェーヴル(1831-1928)その人が中心になって動きました。のちのエヴァーズリー卿は、建設委員としてハンプトン・コート、キューガーデン、リージェント・パークなどをオープン・スペースとしてロンドン市民が自由に出入りすることを可能にしました。さらにコモنزという広大な土地を、法的に整備し、より多くの土地(コモنز)を買収し、人々のレクリエーションに供した彼の業績を忘れてはならないでしょう。

「オープン・スペースを人々に提供するため、ロンドン周辺の森林地、コモنزを確保する必要」は、1865年以来、国会ですでに議論されていました。エッピング・フォレストやウインブルドン・コモنزなどの崩壊が目前に迫り、さらに議論は白熱していきました。結果、ロンドン・コモنز法という法律によって、1万エーカー以上の180にのぼるオープン・スペースを保存委員の手にゆだね、囲い込み地主の力を無効にし、人々に自由なアクセスを可能にするという驚異的な転換をうながしたのです。

この運動にかかわった主要な人物に、『トム・ブラウンの学校時代』を書いたトマス・ヒューズ、弁護士チャールズ・エドワード・ポロック、有名な経済学者ジョン・スチュワート・ミルなども加わりました。ミルは貧農の暮らしぶりを目の当たりにし、コモنز保存を強く意識し、「コモنز保存協会設立に助力し、…この協会の目的推進のため」努力を惜しまない、と信条を吐露しています。

悲惨な大地になることをまぬがれたイギリスの現状をここでじっさいに確認する機会をいっしょに体験しておきたいと思います。

結びにかえて——コッツウォルドでの散策

つまり、最後に皆様にご覧にコッツウォルドでのウォーキングを疑似体験してもらいましょう。今日お手元に配りましたのはコッツウォルドで発行されている9月から12月にかけてのウォーキングの日程表です。ご存知のとおり、コッツウォルドは日本人観光客にもっとも人気のある観光地です。風光明媚で手つかずの自然が無垢のすがたをとどめているところです。今日は7月11日土曜日ですから、同じ月日の項目を開いてご覧になって下さい(図27)。

朝の10時に集合して、ほぼ7マイル約10キロの距離を4時間かけて歩くわけです。ランチにはパブに

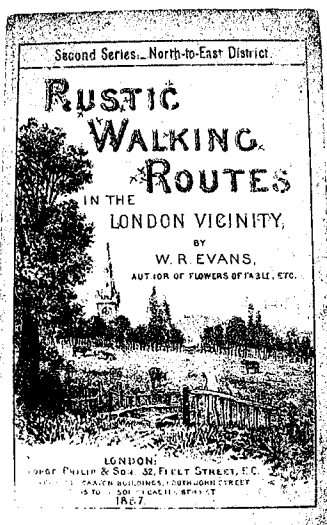


図26 ウォーキングガイド



図27 『コッツウォルド・ライオン』

寄り、サンドウィッチを片手にビールの杯を傾げる楽しみが待っています。ブロードウェイという丘を散策するのですが、今年はコッツウォルドではヤマウズラ、ホウジロ、タケリ、スズメ、セキレイ、キジバトなどの野鳥を特定して保護に力をいれています。またこの紙名は『コッツウォルド・ライオン』というのですが、当地では古くから羊毛業が盛んで、毛がライオンのようにふさふさした羊が飼育されています。それにならったのでしょうか。

ライオンのたて髪のような羊の背景に「空積の壁」があらわれています。これは実にイギリスらしい、コッツウォルドならではの光景です。2億1千年前のジュラ紀にできた「魚卵岩」という岩石が積みあげられています。それから後年になり18世紀に激しさが増す囲い込み運動が起きた時、隣地との境界線としても使用されました。羊が他所の土地へ移るのを防ぐわけです。

私たち歩行者は、時間、歴史のなかを、積み石の歴史のなかをくぐっていくのです。1966年にはこの積み石がコッツウォルドの歴史的景観として認定されています。この岩には中世に羊毛業が盛んになってきた史実、クロムウェルとの戦いで、ここに議会派が身を隠した史実も刻まれているのです。そんなわけですからこの積み石に歴史的な想像力をふくらませていくと故事来歴が走馬灯のようにかげめぐるというわけであります。歴史的時空を自由に逍遥するのもウォーキングの愉しみであり、歴史の垂直的な時間を読み取ることも確かに心躍ることでしょう。だが、「現在」も忘れてはいけません。

歴史とはまったく異なる側面、つまり空積に生息している生物にも注目してみましょう。ハチ、野ネズミ、コケ、キアオジ、エゾデシダ、チドメグサ、トカゲ、ミソサザイなどの動植物の名前を即座に挙げる事ができます。子どもたちの自然観察にはうってつけです。また大人たちも童心を取り戻す瞬間です。親子そろって生きた自然史に参加できるというわけです。また、フットパスがあらゆる生物との共生の場であると再確認できるわけです。

ウォーキングの意義 もうお分かりかと思いますが、私たちが歩くということは、今日お話し申し上げた歴史的過去を追憶すると同時に、その歴史的過去が現在に重なる、「その一瞬」にも立ち会うことができるのです。これぞウォーキングの特権的な醍醐味ではないでしょうか。

このドライストーンの積み石は4000マイルほぼ6400キロに及ぶと書いてあります。英国人は自国の歴史を非常に誇りにしていますから、つい自慢にかたむいてしまいます。古さ、大きさ、長さなどでも世界一を標榜したいわけなのです。ここには石積みの長さは、万里の長城に匹敵すると書いてあります。でも、中国のそれは8800キロにも及び、2000キロほど足りません。どうかイギリス人のお国自慢に免じて、「これくらい」の誤差は大目にみてあげてください。悪気はないのですから。とはいえ実に遠大で眩暈を覚えるような長さです。

今日の講演は、赤ん坊の「歩き初め、ファースト・ステップ」から人間の歩行を語りおこし、『コッツウォルド・ライオン』に予告されている（2009年7月11日）紙上散策のウォーキングに至るまで、ほぼイギリス文化史上500年にわたる人間の「歩行」を皆様とごいっしょに検討してきました。人間の一步はその足跡を残すことはできませんが、あえて消えた足跡（歩行の文化史）をたどることで、歩くことを中心に見すえた文化のゆるやかな流れ、変遷、その歩みの一端をお伝えできれば講演者としてこれ以上の喜びはございません。

つたない話を長時間にわたり、ご静聴くださり本当にありがとうございました。

〈以上は2009年7月11日（土）甲南大学813講義室において開催された講話に基づく〉

平成20年度研究チーム活動中間報告（第2回目）

「大学教育における学習への動機づけ研究—甲南大学の教育効果を高めるための1つの試み—」

No.106 研究幹事 藤原三枝子（国際言語文化センター）

本研究チームでは、2008年度より、教育学的視点、社会学的視点、および言語教育研究の視点から、学際的協力によって、大学生の学習動機づけ研究を進めてきた。2009年度は、以下に述べる個人研究を進めるとともに、研究チームとしては、関連文献の情報交換や質問紙実施に際しての協力、各自の研究テーマに関する疑問点の検討などを重ねてきた。

2009年度の個人研究は以下のテーマを中心とした：

1) 「学生の学びの実態把握と教育成果に焦点を合わせた組織的學生調査ネットワークの構築」のための基礎的研究と、他大学との連携による調査の実施

甲南大学は、2009年度に文部科学省による「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」を、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学と連携して実施することになった。「相互評価に基づく学士課程教育充実のための創出一国公立4大学IRネットワーク」という主題で、甲南大学でも、学生に対する「学習を基本とした調査」を本学1年生に対して実施した。この調査データと、言文センターで実施している「CASECスコア」調査データを使いながら、甲南大学生の「英語学習・教育」にかかわる学生の「学習動機」等について分析した。こうした分析結果と総合研究所における共同研究とのコラボレーションが実現すれば大きな成果が期待される。（平松闊）

2) カナダあるいは日本に留学して、その目標言語を習得する学生たちの動機と意味づけに関する量的および質的調査

本研究では、日本語と英語の学習者の留学動機とそのコンセプトを調査分析した。それと共に、Deci & Ryanの自己決定理論の枠組みの中で、学習者の留学経験がそれぞれの自己形成にどのように反映しているのかを考察している。考察の結果、留学経験は日本語と英語の学習者について共に自己決定度の高まりをもたらし、第二言語学習と自己形成に効果的に影響することが指摘された。今回の研究と考察を通じて、日英語の学習者の留学動機のコンセプトとして、日本語には「日本語による対人関係と文化的意味空間の形成の志向性」、英語には「国際的コミュニケーション能力養成の志向性」が認められた。（原田登美）

3) 教師の主観的な言語観、言語学習観、言語教育観が学習者の学習意欲形成に与える影響に関する調査

2009年度は、甲南大学を始め7つの大学で、“Start frei!”（三修社 2009年）を使ってドイツ語授業を行う教師8名に、以下の研究協力を依頼した。すなわち、8名の教師が、前期・後期それぞれ2回ないし3回、学習者に「学習記録」への記入を促し、教師側もその記録を検討しながら「授業記録」を記すというものである。筆者はこれらのデータを基に、先の教師への聴き取り調査を各学期末に実施し、教科書のコンセプトが学習の動機づけに影響を及ぼす要因を、学習者ならびに教授者双方の視点から調査・分析する。（森田昌美）

4) 外国語としてのドイツ語学習の開始動機調査と、教科書のコンセプトが学習者の動機づけ形成に及ぼす影響調査

2009年度は、甲南大学で行った「ドイツ語学習開始動機」調査の分析を中心に研究を進めた。ドイツ語学習に対して、5つの潜在的動機が抽出された。「自己決定理論」の枠組みで実施した調査の分析では、有能感は、「内発的動機づけ」および「自律性をささえる関係性」と有意な正の相関を示した。また、「内発的動機づけ」は、「同一化調整・取り入的調整」と有意な正の相関を示し、「外的調整・無動機」とは有意な負の相関を示した。この調査結果は、国際言語文化センター紀要『言語と文化』14号（2010年3月発行）に発表予定である。

学生へのインタビューなどによる質的調査は、2010年1月末まで継続して実施されている。(藤原三枝子)

今後は、この2年間の研究結果を総合研究所叢書に発表するために、実際にそれぞれの立場から行った調査結果を持ち寄った上で、チーム全体として調査結果を分析して、学生の学習意欲を引き出し、高め、維持するための教育の可能性を探っていきたい。

「大学とメディアとの新たな連携を求めて——教育・研究・社会貢献」

No107 研究幹事 井野瀬久美恵 (文学部)

大学の使命は、教育、研究、社会貢献に大別される。本共同研究は、これらをメディアの視点、すなわち、実態・実相とは別に(ある意味での)「現実」を創り出している立場から大学という場を見直し、「今大学は何をすべきか」を再考するとともに、甲南大学のブランド力強化を模索したいとの志から立ち上がった。以下、「」付きで使用する「現実」とは、メディアを中心に創造されて一般社会に流布している(いわば)イメージのようなものを指す。このイメージが、当事者(本研究においてはわれわれ大学人)以外の人たちには「現実」だと思われていることが多い。本共同研究が問題にするのは、それとわれわれの実態や実相との乖離であり、この乖離のなかにまだ見えていない本学の可能性を探ることにしたいと考えている。

1年目となった2008年度は、甲南大学の「今」を見直すために、テレビや新聞の第一線で活躍するメディア人との意見交換をおこない、大学の実態・実相とメディアから見た「現実」とのずれを検証した。「大学人の多くが社会的ニーズを意識した研究をしていない」をはじめ、メディアによる大学の格付けと分節化が進むなか、本学のような私立大学については「教育力が見えない」という痛烈な批判が寄せられた。メディア関係者の意見のなかには、実態・実相を知るわれわれ大学人にしてみれば「まったくの誤解」というものもあったが、「誤解」という事実自体が、彼らに——ということは広く社会に、大学の実態も実相も見えていないことを示している。そこから生じるジレンマのようなものが、甲南OB/OGとの意見交換でも感じられた。

大学は今どこを見て何をしようとしているのか、大学という場は今の日本社会の求めにどのように応えようとしているのか、あるいは応えていないのか。そもそも21世紀の日本社会は「大学」という場に何を求めているのだろうか。教育、研究、社会貢献という大学の使命を「連携」をキーワードに考えた本共同研究会のメンバーには、次第に、こうした問題についてわれわれ大学人が率先して世論に発言、アピールしてこなかったこと、だからこそ上記の意味における「現実」が意味を持つことが見えてきた。昨年秋、民主党政権のもとでおこなわれた「仕分け」という政治ショーのなかで文科省GPやグローバルCOEなどが次々と減額された事実、しかも仕分け人にわれわれの同業者の占める割合が高かったことを考え合わせると、世論はおろか、内部に対しても、大学人はそれぞれの有用性、存在意義を説明してこなかったことが痛感される。

大学設置基準の大綱化・簡素化以降、毎年のように大学の増設が続くなかで、大学という場の意味もその機能も変化をよぎなくされてきた。それを今改めて再認識すべきだと、自戒を込めて強く思う。実際、私が入学した1976年には423校(進学率27.3%)だった大学の数は、1996年には567校(進学率33.4%)となり、その10年後の2006年には744校(進学率45.5%)となった。20世紀から21世紀への世紀転換期に、大学増殖のスピードが大幅に加速化されたことがはっきりとわかるだろう。質的劣化、格差拡大という顛末は、当初から予想されていた。にもかかわらず、われわれは、自分自身の「大学経験」との差に驚くあまり、自分たちの実相がうまくつかめていなかったといわざるをえない。変わりゆく教育環境のなかで社会に必要とされる大学の存在意義を大学人がうまく伝えてこなかった、いや伝えられなかったのはそのためだろう。その結果、「大学人がアピールしたいこと」と「大学人にアピールしてほしいこと(あるいは大学人がアピールしなければならないこと)」の間にギャップが生じ、それに無自覚なままに、両者の差が年々拡大していった。それを本学にひきつけて明確化したことこそ、昨年度の(いわば)研究成果だといっていいだろう。

このギャップを正確に把握し、われわれの今後の実践に生かすこと——これが共同研究2年目となる2009年度の課題であった。具体的には、「大学の出口=就職」と並んで大学のブランド力強化が試される「大学の入口」

を中心にして、「われわれの実相」と「彼らの現実」のずれを多様に探ることを試みた。言い換えれば、われわれ大学人は、今の高校生の実態・実相を知ったうえで、大学での教育（その中身とそれを教える手法）を考えてこなかったのではないかとこの自問に答えを見いだそうというのである。今の高校生の実態、彼らの価値観やメンタリティー、自分の人生をまなざす彼らの目線、そのなかでの「大学進学」の意味と具体的な大学の選択——これらすべてが、われわれが学生時代を送った1980年前後とは全く異なる環境のなかにある。「大学全入時代」という言説のなかで、「大学へ行くこと」の意味もその選択基準も大きく変わってきているにちがいない。われわれがメディアを通じて知る「現実」ではなく、「彼らの実相」を生の情報からつかんだうえで、「われわれは今何をなすべきなのか」に知恵を絞るべきであろう。

そのために、2009年度最後の研究会として、1月末には高校の進路指導担当の先生方との意見交換を予定している。そこでは、以下の問いを議論の糸口としたいと考えている。

1・今の高校生は受験する大学や学部を選ぶ場合に何を最も重視するのか。

- ①将来の職業
- ②大学のネームバリュー
- ③学部で学ぶ内容
- ④自宅からの通学距離
- ⑤オープンキャンパスでの印象
- ⑥進路指導教員のアドバイス
- ⑦両親や兄弟・姉妹、身内からのアドバイス

2・高校生のキャリアプランのなかで大学進学はどう位置づけられているのか。進学指導に当たる先生方は、大学進学にどのような「意味づけ／位置付け」を与えているのか。

3・その意味づけ／位置づけに「応えている大学」とは具体的にどういうものか？

4・甲南大学は実際の進路指導においてどのように位置づけされているのか。

5・「高校の出口」での生徒の質的保証の実態とそれへの対応策をどのように考えているのか。

6・今の高校生のモラルはどうなっているのか。「問題を起こす生徒」とはどのようなもので、その場合の「問題」とは何か。「問題」の質はどのように変化してきているのか。高校ではそうした「問題」をどのように把握し、どのように指導しているのか。

7・高校教員がすべきだが、時間等の関係で実施できない業務のうち、大学が協力できる業務とは何か。あるいは、高校教員がする必要がないのに、諸般の事情から時間を費やしている業務、あるいは大きな負荷になっている業務のうち、大学が協力できる業務は何なのか。

上記について率直な意見交換をおこない、今大学がなすべきこと、とりわけ甲南大学が応えるべき中身を明確化するとともに、甲南のブランド・イメージにも話を広げながら、高校の進学指導の立場から甲南大学がどう見えるか、何ができて何ができていないのかという（文字通りの）実相と「現実」のずれを考えたい。そして、今という時代に必要な大学戦略の一端に何らかの道筋がつけられればと考えている。

「高齢者の認知機能に及ぼす歩行運動効果の電気生理学的研究及びバイオメカニクス的研究」

No.108 研究幹事 曾我部晋哉（スポーツ・健康科学教育研究センター）

【背景】我が国における認知症の罹患者数は150万人を越え、65歳以上の高齢者での有病率は3.0%～8.8%と言われている。この認知症を早期に発見することで、認知症の進行を遅らせることも可能であるとされる。中間報告第1報では、アルツハイマーと医師より診断された被験者及び一般健常高齢者を対象に、不規則な課題遂行運動を実施させたときの歩行加速度パターンに被験者間に特徴的な差があるかどうか検討した結果、アルツハイマー型認知症では、後退するときに急激な加速、および前進運動から停止する際に大きな加速の低下が

生じることで大きなマイナスの加速がみられたが、逆に健常高齢者では、加速してから等速運動に到達するのが緩やかであり、加速が徐々に生じ等速運動へスムーズに移行した。しかし、第1報ではコントロール群を健常高齢者としていたために、一般成人ではどのようなパターンを示すのか明らかではない。

【目的】そこで、本研究では一般成人を対象に、不規則な課題遂行運動を実施させたときの歩行加速度パターンはどのような特徴がみられるのかを検討した。

【対象】本実験は、健常成人6名（平均 22.3 ± 0.5 歳）を対象とした。本実験の前に甲南大学ヒトを対象とした倫理委員会より実験実施に関して承認され、健常高齢者に関しては実験に関するリスクを承諾の上参加した。

【方法】各被験者には、正面のモニターに表示される「前進」、「後退」、「停止」の指示に従い歩行を継続させ、この視覚刺激は2秒毎に不規則に与えられた。この歩行運動は2分間継続させた。各被験者の左右腸骨を結ぶ直線と脊柱が交差する点に、三次元加速度装置LegLOG（バイセン株式会社製）を装着し、視覚刺激が与えられた際の加速度をサンプリング周波数2000で記録した。X方向を上下（+X, -X）、Y方向を前後（+Y, -Y）、Z方向を左右方向（+Z, -Z）と規定した。本報告では、「前進」、「後退」、「停止」の指示から動き始める際の加速度を平均化した。

【結果】本報告では、参考までに前後方向（+Y, -Y）のグラフを図1に示す。

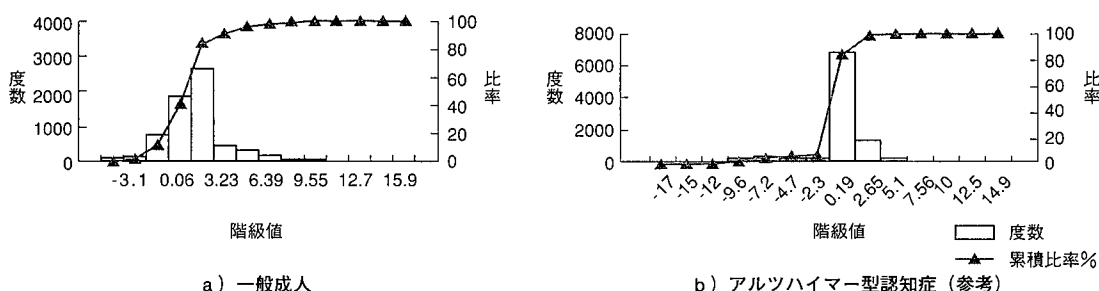


図1 加速度のヒストグラム

健常成人では、視覚刺激後の加速が急速に高まり、その後等速運動に移行した。更に、最高加速度が先の健常高齢者及びアルツハイマー型認知症の対象者と比較して、最も大きい値を示した。

【考察】本研究の中間報告1及び2からアルツハイマー型認知症、健常高齢者、一般成人の特徴が明らかとなった。アルツハイマー型認知症には歩行障害も症状のひとつとして挙げられているが、認知症の初期において歩行状態から認知症を把握することは困難である。しかしながら、本結果を応用することで、認知症の初期症状が簡易に判断することが出来る。しかし、被験者数が少ないことから今後更なる検討が必要である。

「会社法理論とファイナンス理論の相互作用の国際比較」

No.109 研究幹事 家田 崇（会計大学院）

1：本件研究の対象

平成17年に制定された会社法の特徴として、ファイナンス理論を積極的に取り入れて制度を構築している点が指摘できる。これにとどまらず会社法の領域においては、いわゆる「法と経済学」の手法が分析手法として積極的に取り入れられている状況にある。本件研究の目的は、会社法の領域を中心に「法と経済学」を分析手法として用いる際に問題となる点を検討することにある。具体的な問題点として、①ファイナンス理論を中心に、経済学の理論が法制度にどのように作用したのか、②諸外国において「法と経済学」は会社法の領域においてどのように検討されてきたのか、さらに、③近時における経済理論の展開によって「法と経済学」に対してどのような問題点が指摘されているのか、という点を検討していく。

2：経済理論が法制度に与えた影響と問題点

日本の会社法に影響を与えた経済理論を具体的にとりあげ、その概要と法的に検討されるべき点を考察している。まず、オプション評価理論がわが国の新株予約権制度および種類株式制度に与えた影響を分析した。ここでは、まず、オプション評価理論は、第三者に対する新株予約権の発行に伴う法的問題点を解決するには有用な論拠となることを指摘する。会社法制度の現代化によって、新株予約権制度ないし種類株式制度が多様化した結果、買収防衛策として新株予約権が多用されている状況が導かれているが、新株予約権の導入に至るまでの検討では、このような利用方法はオプション評価理論を論拠とした新株予約権制度の創設経緯においては想定範囲外とされていることを指摘している。

次に株主に対する資金返却の経済理論に関連付けて特定の株主への会社資金返却に関連する法的問題点がどのように検討されるべきか分析を行った。ここでは、特定の株主に対する会社の資金返却はどのような法的論拠に基づいて認められるのかについて検討を進めている。

3：諸外国における「法と経済学」

諸外国における「法と経済学」の現状に関連しては、ヨーロッパにおける「法と経済学」の状況について検討を行った。フランスにおける一つの分析によると、1975年頃から「法と経済学」の動きはアメリカ合衆国の外へと広がり始め、オーストラリア、カナダ、イギリス、そしてスウェーデンにおいて感心が示されるようになった。ドイツ語圏においては比較的早く「法の経済分析」の動きが受け入れられ、ベルギーのフランダース地方とオランダにおいては1980年代の終わり、イタリアにおいては1990年代の終わりから「法の経済分析」に対する関心が強くなっているという。これらの国々に比してフランスにおいて「法と経済学」が学問として注目され出したのは、遅かった。しかし、現在では「法律家は『法と経済学』に改宗しなければならない。……我々は法の経済分析から逃れることはない。」と言われるまでの状況に至っている。もっとも、フランスでは、「法と経済学」はアメリカ産であるとの認識が一般的であり、コモン・ローの国で発展した理論をとシビル・ローの国にそのまま取り入れることができるのか、「法と経済学」の前提とする経済理論や合理的経済人 (*homo economicus*) の概念に対する疑問が投げかけられている。

今後は、これらの結果を踏まえ、さらに「法と経済学」の各国における状況やコモン・ローとシビル・ローの国における「法と経済学」の意義、多様な文化を有する国々における合理的経済人概念の意義等についてさらに研究を深めていくことを課題としたい。

4：近時の経済理論の展開

近年のファイナンス理論の展開について行動経済学に着目して分析をしている。行動経済学では、いわゆる合理的経済人という仮定に疑問を持ち、実際の行動パターンを考慮に入れて経済的モデルを再構成している。このように実際の行動パターンと合理的経済人がとるべき行動に差異がある場合に、法制度はどのようにスタンスを取るべきなのかを課題に、会社にかかわる意思決定や投資行動に関して、行動経済学の知見から会社法制度に得られる示唆を検討している。

平成21年度研究チーム概要

◎研究課題 (No110)

「東アジアにおける戦争と絵画」

*研究の目的

前近代の東アジアでは、国内の戦だけではなく、国家間においても戦争が行われた。その中でも東アジア全体、つまり日・韓・中を巻き込んだ戦争としては「文永・弘安の役 (1274・1281)」、「文禄・慶長の役 (1592～1598)」が取りあげられよう。

本研究は、これらの戦争がいかなる意図で絵画として描かれ、その絵画がどんな過程を経て今日にまで残っているのか、そして戦争がその後の絵画、ひいては政治・社会・思想などにいかなる影響を与えたのかについて明らかにするのが、その目的である。

*研究の内容および効果

「文永・弘安の役」は、蒙古と日本の戦争ではあるが、高麗を服従させた蒙古が高麗を先立たせて、日本に攻めてきた戦である。そして、「文禄・慶長の役」は、朝鮮対日本という構図であるが、朝鮮の宗主国である明が参戦しており、いずれの戦争も東アジア諸国を巻き込んだ国際戦であったのである。

ところで、この戦争を題材にした絵画が日・韓・中のそれぞれに伝来されている。例えば、「蒙古襲来絵詞」(宮内庁所蔵)、「征倭紀功図巻」(中国系アメリカ人所蔵)、「東萊府殉節図」(韓国陸軍士官学校博物館所蔵)、「平壤城奪還図屏風」(韓国国立中央博物館)、「壬辰倭乱図屏風」(和歌山県立博物館所蔵)、「蔚山城戦闘図屏風」(坂本五郎所蔵)がそれである。これらの絵画には戦場や戦闘の様子が描かれており、その作成意図を紐解くことで、戦争の本質や戦争に関わった人々の戦争に対する認識を把握することができると思われる。したがって、日・韓・中の歴史や戦争の掟を踏まえた上で絵画を分析することは、東アジア諸国の歴史における戦という意味合い、ひいては戦争以降の絵画の動向を追究するのに欠かせない研究と言える。

*総合研究として研究することの必要性

東アジアの全体を視野に入れた本研究における試みは、総合研究として相応しく、特に絵画を分析の材料として使う研究手法は、前近代における歴史の分析においても重要な意味をもつと言えよう。しかし従来の研究においては、日・韓・中を同時に視野に入れ、絵画を介して研究するという方法は行われてこなかった。したがって、日・韓・中を巻き込んだ戦争画の研究は、東アジアの絵画研究だけではなく、各国における戦争の本質やその掟を具体的に理解する上でも不可分であり、総合研究が必要である。

*研究チームメンバーと所属と研究課題

金 泰虎 (研究幹事)	国際言語文化センター	前近代における日・韓・中を巻き込んだ戦争とその絵画 - 「文永・弘安の役」や「文禄・慶長の役」を素材に
佐藤 泰弘	文学部	「蒙古襲来絵巻」
趙 ギュヒ	韓国高麗大学校民族文化研究院	「文禄・慶長の役」以降における朝鮮士大夫の文化認識と絵画
李 京和	韓国ソウル大学校文科大学考古美術学科	朝鮮時代後期の絵画に現れる「文禄・慶長の役」の記憶
李 須恵	財団法人高麗美術館 高麗美術研究所	「文禄・慶長の役」以降に朝鮮から来日した図画署画員の絵画
大村 拓生	大阪工業大学	南北朝内乱期における丹波の戦と絵画

◎研究課題 (No.111)

「日本語教育用学習支援システムを利用した読解教材の開発」

*研究の目的

本研究では、研究幹事の北村らが1996年から開発・運用を続けてきた日本語教育用学習支援システム「リーディング・チュウ太 (Reading Tutor)」をさらに発展させるとともに、これを援用して日本語学習者向けの読解教材を開発することを目的とする。近年、言語学習の分野では、多読 (多量の文章を読むこと) にもとづく学習法や自律学習がトレンドとなっている。しかし、そこで問題になるのが、学習者の興味を満たす多様な読解教材 (語彙に関する説明を含む) をいかにして用意するかということである。本研究では、自然言語処理技術を応用することによって読解教材を作成する技術を開発するとともに、その読解教材を活かす教授法も開発する。さらに、これらの技術に関する講習会を日本語教師向けに開催し、研究成果の普及を目指す。

*研究の内容および効果

本研究では、学習レベルに応じて教材の単語リストを自動作成するシステムを開発し、それを用いて読解教材を作成することを目標とする。あわせて、このシステムおよび読解教材を利用した教授法も開発する。さらに、このシステムを携帯端末 (携帯電話、音楽端末、ゲーム端末等) から利用できるように改良する。このシステムを用いることにより日本語教師は読解教材作成に要する人的コストを抑えることが可能である。また、このシステムは日本語教師ばかりでなく学習者も利用することができる。従って、学習者は興味のある文章をこのシステムで処理して自己の日本語能力レベルに見合った読み物として調整することができ、自律的に学習したり読書を楽しんだりする多読環境が実現できる。さらに、このシステムに関する講演会を開催することによって教育現場での利用が促され、この技術が日本語教育界におけるデファクトスタンダードとなることが期待できる。

*総合研究として研究することの必要性

教育・学習を支援するシステムを開発し、さらにそれが教育現場で実際に利用されるようになるには、教育現場との密接な協力関係が必要不可欠である。現場の教師のフィードバックに丁寧に応えていくことが競合する他のシステムに対する優位性を作っていくことにもなる。

*研究チームメンバーと所属と研究課題

北村 達也 (研究幹事)	知能情報学部	読解教材作成支援システムの開発、インターネットでの教材提供
森川 結花	国際言語文化センター	読解教材の作成、開発するシステムを活かした教授法の開発、本学での試用および評価
永須 実香	上智大学・国際教養学部	読解教材の作成、開発するシステムを活かした教授法の開発、上智大学での試用および評価

◎研究課題 (No.112)

「日本におけるマイノリティ企業家の研究」

*研究の目的

日本のマイノリティとしての在日韓国・朝鮮人、在日中国人の中から、目覚ましい成長を成し遂げた企業

家が登場している。遊技業のマルハン、MKタクシー、ソフトバンク、日清食品、アイリスオーヤマなどがそれらの企業であり、マイノリティの企業活動は日本経済の一部を構成している。これらの企業では創業者の強烈な起業家精神が企業成長の原動力であったが、いくつかの企業では創業者が死亡・高齢化し次世代に継承されている場合も多い。本研究は、マイノリティの企業の創業者へのインタビューを行い、そのアーカイブを作成し、マイノリティの企業家の比較研究を行うことを目的としている。

* 研究の内容および効果

日本のマイノリティ企業家として、代表的なものをあげ、その資料を収集する。これらマイノリティ企業の創業者は個性的なアントレプレナー精神をもち、マイノリティとしての様々な逆境を乗り越え企業を発展させてきたといえる。彼らにインタビューを行うことで、これら企業の発展過程、創業者の経営理念とリーダーシップについて分析する。また、彼らが存命のうちに、インタビューをDVDに収録しアーカイブスとすることで、今後の研究に広く活用できる基礎資料を作成したい。

これらの研究は、日本経営史においてあまり分析されなかったマイノリティ企業に関するアーカイブスという一次資料を提供することで、今後の日本経営史に貢献できるという効果をもつ。

* 総合研究として研究することの必要性

マイノリティの企業家研究には、経済学と経営学のアプローチが可能であり、両分野の専門家の共同研究が必要とされる。また、未開拓な研究分野であるため、様々な一次資料を集めるため、若手研究者も含めた共同研究が必要となる。

* 研究チームメンバーと所属と研究課題

高龍秀 (研究幹事)	経済学部	在日韓国・朝鮮人企業家に対する経済的分析
西村順二	経営学部	マイノリティ企業家の企業戦略とマーケティング戦略の分析
崔相鐵	流通科学大学商学部	在日中国人企業家の企業戦略とマーケティング戦略の分析
金俊行	経済学部	在日韓国・朝鮮人企業の国際ビジネスに関する分析
柳到亨	和歌山大学経済学部	在日韓国・朝鮮人企業の一次資料の収集

◎研究課題 (No.113)

「アジア地域における“持続可能な未来”のための環境教育学」

* 研究の目的

現代の地球環境問題において、持続可能な未来を維持する「環境教育学」の理論的研究と具体的実践を担う環境教育のプログラム開発がもてられている。とくにアジア地域では環境破壊が進んでおり、欧米的な自然保護志向による環境教育よりも、地域の環境、歴史・伝統文化の多様性と特殊性を考慮した内発的な環境教育の研究が必要である。

本研究では、原理的な環境教育学の研究を推進するとともに、多様な地域文化と風土に即して環境教育の指導者の人材育成をも視野に入れたモデルプログラムの開発を行なう。そのために、サイバーキャンパスの構築によって国際的な環境教育学の教材を開発し、アジア地域でのライフスタイルをめぐる諸課題を各国・地域・大学間で共有する。そして、その成果はアジアの人々のレベルに応じて教育効果が浸透するよう衣・食・住をテーマとしたライフスタイルの改善を目指し、「国連持続可能な開発のための教育の10年 (ESD) /2005-2014年」の内実を具体的に展開する。

1) 環境教育プログラムの開発と人材育成の目的

持続可能な地球環境を維持するための活動として、まずアジア地域における大学間の「環境教育学」充実をはかり、次にその理論的方法論をアジア地域の住民のライフスタイルにおいて応用・活用できるような環境教育プログラムの作成とそれによる人材育成を本研究の第一の目的とする。

2) 国際環境教育ネットワークの構築とサイバーキャンパスの設立の目的

申請者は、現在までにe-ラーニングによって、中国・北京大学、タイ・プラナコーン＝ラジャバト大学、マレーシア・マラヤ大学などの大学と連携を行ない、他方、国内では宮城教育大学、広島修道大学などの大学間および環境省、国土交通省、林野庁、大阪府などの行政機関とネットワークを構築し授業を実施してきた（「国際環境教育ネットワーク」「国内環境教育ネットワーク」）。それを発展させて、アジア圏におけるサイバーネットワークによってリアル・タイムな環境情報を得るとともに、生きた教材を活用する。このようにして、甲南大学においてアジア地域と国内のネットワークをリンクした「サイバーキャンパス」を設立することが第二の目的である。

3) ライフスタイルの変更の試み

サイバーキャンパスで扱う環境教育は、開発された環境教育プログラムにしたがって、アジア各地域性を活かした具体的な実践によって衣・食・住についてのライフスタイルの改善を試み、持続可能な未来のための環境教育を実施することが第三の目的である。

* 研究の内容および効果

本研究プロジェクトでは、1. 大学間、産学間における環境教育カリキュラム・教材開発、人材養成プログラムの共有化と検証、2. アジア地域を中心とした国際環境教育ネットワークの構築によるサイバーキャンパスの構築、3. ESD（持続可能な開発のための教育）の理論的研究を応用した衣・食・住を基本としたライフスタイルの改善のための環境教育カリキュラム・教材開発、人材養成プログラムの開発と実施の3つを柱に展開する予定である。

1) 環境教育カリキュラム・教材開発、人材養成プログラムの共有化と検証

アジアにおいては、欧米的な自然保護教育による環境教育よりも、地域に根ざした環境、風土、歴史、伝統文化の多様性と特殊性を考慮した「内発的な環境教育」の展開がもてられている。そのため、地域文化に即した環境教育の質的向上を目指す教授法やカリキュラムのモデルを開発する。その研究効果は、アジア地域において人々が自発的に学習意欲を喚起できるモデルプログラムを作成し、それとともに地域の人々が自立できるような指導を行なう人材育成ができることである。

2) アジア地域におけるサイバーキャンパスの構築

タイ・プラナコーン大学、中国・北京大学、北京北大資源学院、台湾・国立政治大学、マレーシア・マラヤ大学、ネパール・カトマンズ大学とのサイバーキャンパスを設立する。すでにタイ・プラナコーン大学、中国・北京大学、マレーシア・マラヤ大学において動いているネットワークをさらに充実させてアジア地域にまで拡大する。その効果は、リアル・タイムにアジアの環境情報を得るとともに、一流の研究者との共同研究および共同教育をねらう。

3) ESDの理論研究とその応用—衣・食・住のライフスタイルの改善をめざした環境教育—

持続可能な未来をめざしアジアの地域環境や伝統文化を尊重する環境教育プログラムによって、環境保全、予防・衛生、人権、平和、貧困、差別などをテーマとするESD（国連持続可能な開発のための教育の10年）のテーマを取り上げる。その効果として地域の伝統文化を保存する環境教育という視点から、固有の地域におけるライフスタイルの改善、なかでも地域の衣・食・住を枠組みにしたプログラムによってアジア地域の生活環境の改善を実現する。その調査研究のプロセスにおいても、国際的な環境教育ネットワークによる会議を開催するとともに、持続可能で恒常的に利活用できるサイバーキャンパスをより充実する。

*** 総合研究として研究することの必要性**

今日、地球規模で進む環境問題をめぐって、先進国と発展途上国をめぐる環境・社会・経済状況の格差が問題解決への障壁になっている。さらにグローバリゼーションによって、地域の環境や伝統文化そして経済制度が破壊されている。これらに対して、持続可能な未来に配慮した環境教育は格差やグローバリゼーションの問題にも対応しうるものでなければならないであろう。そのために、アジア地域で共有できる環境教育の教材を開発して実施し、各国・地域・大学間でモデルプログラム検証する。このプログラムによって行なわれる教育や人材育成は、地球環境問題に対して伝統文化を基盤とした環境倫理という行動指針を描き、各地域の環境保全活動へとつなげることができる。したがって、自然科学、社会科学、人文科学の分野の研究者による総合的研究として学際的な協力が必要となる。

現在、環境保全、予防衛生、人権・平和、差別・貧困などをテーマとするE S Dの展開が模索されているが、環境教育を中心とした衣・食・住を基本としたライフスタイルの改善にまで十分に接続できていないのが現状である。この意味でも、すべての分野のテーマが総合的に研究されねばならないであろう。

東アジア地域では中国・北京大学、北京北大資源学院、台湾・国立政治大学と連携して、国際環境教育ネットワークを構築する。さらに東南アジア地域においては、タイ・プラナコーン大学、マレーシア・マラヤ大学と連携して、国際環境教育ネットワークを構築する。前者においては、中国・北京大学=日本・甲南大学の間で、後者においてはタイ・プラナコーン大学=日本・甲南大学の間でTV会議遠隔システム（ポリコムカメラ）を使用し、既に大学間の講義を定期的に連携して運用を行なっている。今後の課題は、その範囲を拡張するために、甲南大学をフォーカルポイントとして、東アジア（北京大学・北京北大資源学院・国立政治大学）・東南アジア（プラナコーン大学・マラヤ大学）・南アジア（カトマンズ大学）の大学間を結びつけ、サイバーキャンパスを構築する。ここでも地域の環境を軸として、総合的研究が不可欠となる。

*** 研究チームメンバーと所属と研究課題**

谷口文章（研究幹事）	文学部	環境教育学の研究
久保はるか	法学部	地球温暖化とアジアの環境政策
岡田元浩	経済学部	経済学史からみたアジアの労働環境
Shrestha, Manoj L.	経営学部	ネパールの環境政策
小西幸男	国際交流センター	環境法・政策と環境教育
藤原三枝子	国際言語文化センター	異文化理解教育と環境教育
Chinatat Nagashinha	タイ・プラナコーン=ラジャバト大学 環境教育センター・理工学部	タイの環境教育
劉兆榮	中国・北京大学環境学院 環境化学	中国の環境教育
Azizan Baharuddin	マラヤ大学	マレーシアの環境教育
林 其昂	台湾・国立政治大学財政學系	台湾の環境教育
谷 莊吉	高齢者ケアセンター甲南診療所	環境の医学
清水芳久	京都大学大学院工学研究科附属 流域圏総合環境質研究センター	水環境の諸問題
浅野能昭	環境省 九州地方環境事務所	国立公園をめぐる九州・北海道の環境政策
大久保規子	大阪大学大学院法学研究科	環境法・政策
渡辺りわ	神戸親和女子大学・大阪工業大学・ 大阪産業大学	

